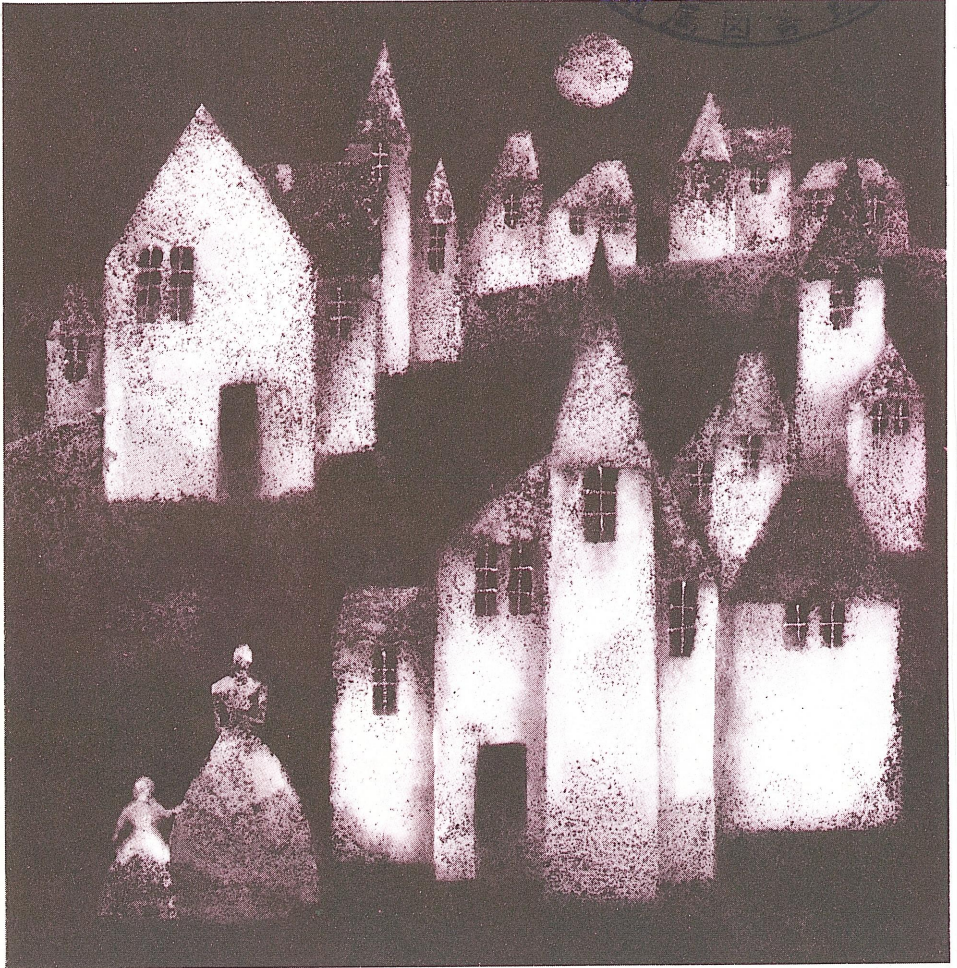
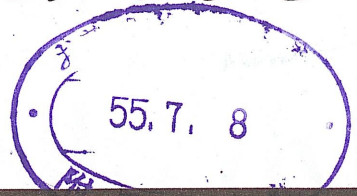


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

8

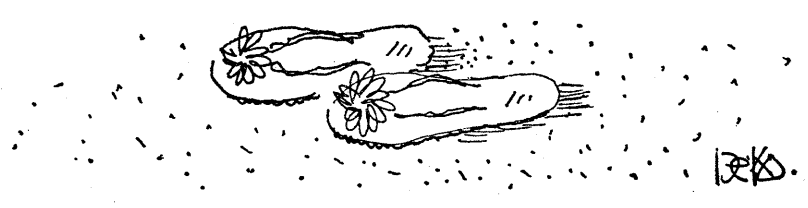


第七十九卷 第八号 日本幼稚園協会

幼児の教育

第七十九卷 第八号





幼児の教育 目次

——第七十九卷 八月号——

© 1980
日本幼稚園協会

表紙 駒宮 録郎
カッタ 中島 英子

北辰・衆星に思うこと……………堀内 康人…(4)

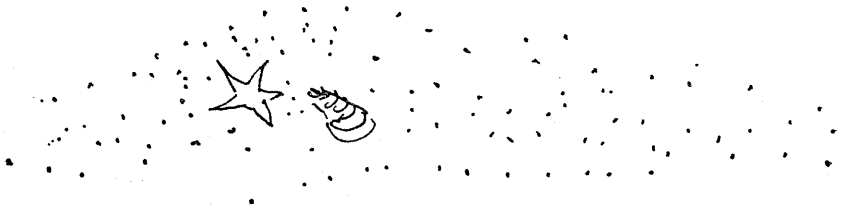
ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十三・最終回)……………海老沢 敏…(6)

倉橋惣三への一つの接近(その三)

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」

の多層性……………本田 和子…(14)



☆緑蔭図書紹介……………柳田為正…(22)

福井憲彦…(27)

中村弓子…(31)

佐々木保行…(34)

亀井理…(39)

大口勇次郎…(42)

館かおる…(45)

私のシルクロード③……………横張和子…(48)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(三十六)……………津守真…(56)

北辰・衆星に思うこと

堀内康人

北辰居其所、而衆星共之

巧言令色、鮮矣仁

右の言葉は紀元前四、五百年前の時代を生きた中国の孔子様が言った言葉であります。私どもは旧制中学の頃、漢文の時間に姿勢を正してよく読まされたものです。どこかのうなぎやの座敷の床ノ間に、作家の井上靖が色紙に書いた北辰言々が飾ってあり、それを読んだ時の感動をいまだに忘れません。さてお若い方々は読めないといけませんから、最初、読んで見ることにいたしましょう。

「北辰（ホクシン）その所に居りて、衆星これにむかう。」
次に「巧言（コウゲン）令色（レイシヨク）鮮（スクナシ）仁」

と読むのです。最初の言葉の前には為政以德、譬如という言葉があるのですが、政治をするのに道徳によっていけば、ちようど北極星が自分の場所において、多くの星がその方に向つてあいさつしているようなものだ、ということですが。次の言葉は、言葉たくみで顔つきだけよいのでは、仁の徳はほとんどないものだよ、仁の徳というのは、今様の言葉でいうなら、人間の根源、ヒューマニズム、愛などといってもよいでしょう。

ところで藪から棒にこんな古い言葉を出して来たのにはこんな理由があります、それはこの二つの言葉が、幼児教育にたずさわる保育者にも実によくあてはまるということです。

子どもが登園する前に保育室の環境をきちんと整え、やって来る子どもたちがなにごとに興味を示し、なにをはじめるだろうという予想をたてることの出来るような保育者の部屋では、保育者はお部屋の北極星、子どもたちは輝く星の様に美しくまたたき、一生懸命でなにかをやりながら、いつも北極星に視線をなげ、困った時には助けを求めて近よる、北極星は言葉すくなではあるが（星の子が沢山いるので一人の子に多くかわり合うことはできない）静かにあたたくしかも適切なアドバイスを与え、それによって星の子たちはいつそうキラキラ輝き出す、といった夢とロマン、子どもたちの体の中に、ぐんぐんと伸びて行く力と喜び、お互が尊重し合いながら生き生きと活動する保育状況をこの言葉がもっている様に思ふのです。

それに反して次の言葉はどうでしょう、保育の環境は雑然として玩具箱をひっくりかえしたような有様、保育室の中間運動場同然、子どものハイビッチなさわぎが耳をつんざき、保育者が金切声で注意を与え、あたかも喧噪曲の埒塙、こうした保育室では、きまってる保育者はお集りのあとにさせる製作の準備を、子どもの自由遊びの最中にやっており、時々鉢

合せをした子ども達の額に手をあて、「大丈夫たいしたことないわ、泣かないでやりましょう」といったり、部屋の隅っこで危険をさけるように小さくなって絵を描いている子どもにもむかって、大声で、「しっかり描きなさいよ、いい絵が出来るわよ」、などと、うわべばかりの励ましの言葉や、とりつくりつた喜びの表情をつくり、見学者でも来ようものなら、この子どもはどうだあの子はどうだと、いかにも学問的な用語で子どもの状況を説明はするが、仁の心、言うなればひとりびとりの子どもにそそぐ、あたたかな視線もなければ、教育的配慮もない保育者の姿を示しております。

近頃の政治家には孔子様のおっしゃる通り北辰などという高貴な姿は望むべくもなく、口先だけけはうまいことをいって、事実をおおいかくし、それで平気な顔をし悪を重ね、えらそうにふんぞりかえり国民の税金を使って、奥方までつれて外国旅行をする政治家が沢山おる御時世、幼稚園や保育園にも子どもの親の御機嫌ばかりうかがい、見栄えの良い保育に浮身をやつすような巧言令色の園長や保育者があるとすれば、これは一大事である。ということを書いたかったのであります。妄言多謝。

（東京家政大学）

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その二十三・最終回)

海老沢 敏

十三、ルソー的な歌としての

《むすんでひらいて》

私たちは近年ルソー作曲説が一般にひろく定着し、常識となつたかに思われた童謡《むすんでひらいて》について、その由来をたずね、ルソーとの関係をさぐり、またその多様な様態や世界中への伝播について語ってきた。わが国においても、その旋律は讃美歌や遊戯歌のかたちですでに百年以上も前に移入あるいは紹介され、また小学唱歌《見わたせば》のかたちでもちょうど一世紀の日本の歌に変身したものであった。だが、わが国ではこの旋律

は小学唱歌として歌われたほか、キリスト教讃美歌として、信徒の間で親しまれたばかりか、軍歌として歌われたり、遊戯歌として普及し、けっきょくこの最後のかたちで文部省唱歌に採用されたりした末に、現在誰ひとり知らぬ日本人はいないほどの普及を見せ、幼な子の歌として、ほかのどの歌、どの曲にもまして親しまれつつづけているのである。

明治十年代から二十年代、そして三十年代と歌われつつづけた小学唱歌《見わたせば》がやがて歌われなくなった理由は、この歌が初編の第十三として位置づけられている《小学唱歌集》の命運と関連づけて説明することができる。多くの外国曲の編作編曲か

らなる《小学唱歌集》は、わが国の洋楽移入や音楽教育推進の端緒として、好むと好まざるとにかかわらず、まことに重要な役割を果たしたものであったが、やがてその歴史的な役割を果し終える、新しい唱歌集、とりわけ日本人の創作を中心として編集される唱歌集の出現を前に姿を消していくのであった。

もちろん個々の唱歌については、それが長い生命を保ち、風雪に耐えて後代を生きのびていったものもいくつかあることはたしかである。《第十七 蝶々》、《第二十 螢》など、初編に属する歌はその典型的な実例であろう。

しかしながら春秋の景色を主題としたテキストをもつ小学唱歌《見わたせば》も、唱歌集のこうした運命を免れることはできなかったのである。《見わたせば》の歌詞二節はいずれも和歌を思わせるスタイルをもっている。とりわけ第一節（柴田清照作）は《古今和歌集》巻第一《春哥上》に収められた次の和歌を下敷にしていることは明らかである。

「花ざかりに京を見やりてよめる

みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」

《小学唱歌集》がこうした《古今和歌集》的なテキストを多く含んでいるという指摘がある。丸谷才一氏は《小学唱歌集》が樋口一葉の美意識に共通するものをもっている点を指摘しつつ、次

のように論じている。

「が、ここでわたしが一葉を引合いに出したのは、もうすこし別の理由があった。文部省の《小学唱歌集》初編が刊行されたのは明治十四年十一月。ところが一葉は同じ十四年十一月に九歳で、池ノ端の私立青海学校に入学、十六年十二月、青海学校小学高等科第四科を首席で卒業した。つまり、彼女は最初の小学唱歌を歌った小学生であったわけで、いや、果して彼女が小学唱歌を歌はせられたかどうかはともかく、彼女の美意識と共通するものを《小学唱歌集》が持つてゐるとは十分に言ひ得るのである。

事実、われわれは《小学唱歌集》初編、第二編、第三編のいたるところに、彼女が荻の舎の詠草で詠んだと似た主題や手法を見ることがができる。それは《古今集》的美意識による小唄の集であった。たとへば、《第十一 桜紅葉》〔歌詞省略〕にしても、それからこれはルソー作曲の（現在は「むすんで開いて、手を打ってむすんで」）、《第十三 見わたせば》〔歌詞省略〕にしても、伝統的な様式性はいちじるしい。そこには二十一代集的な世界があり、大和絵的な色彩がある。十八世紀フランスの唄は、旋律だけは取り入れられても、歌詞のはうはかういふ日本古来のものだったのである。そして大事なものは、この曲に対してこの歌詞が決して不調和ではないといふことだらう。それはむしろいかにもフランス

十八世紀的な典雅なものになってゐるやうに思はれる。歌詞の第一連は柴田清熙^{きよひろ}、第二連は稲垣千類^{ちか}の作だが、殊に柴田の作詞のほうはよく出来てゐて、一種ロココ的な情緒を感じさせる。^(注1)

(注1) 丸谷才一「見わたせばあをやなぎ花桜」(《太陽》)〈特集《日本唱歌集》第一八二号(一九七八年六月号)二七ページ——二八ページ)〉

丸谷氏が指摘しているのは、〈十八世紀フランスの唄〉の旋律に対して、音楽取調掛が当てはめた歌詞は《古今和歌集》的な日本古来の花鳥風月を歌う〈伝統的な様式性〉のつよいものでありながら、それはまことに美事にマッチしてけっして不調和を感じさせない点であり、この歌がへいかにもフランス十八世紀的な典雅なものに変容しているということであろう。

音楽の、曲の特性については後述することになるが、《見わたせば》がこうした丸谷氏の指摘される歌詞と旋律の一致、調和によって、ひとつの完結した唱歌の世界を創出し、優雅な曲調によつて、典型的な唱歌のひとつとなったことは事実であろう。しかしながら《見わたせば》が、たとえば《蝶々》が、あるいは《雀》が、歌詞を部分的に変えながらも、その唱歌のかたちのまま、明治、大正、そして昭和と生きつづけていったのと異なり、旋律は

別として、この《見わたせば》の歌詞による小学唱歌として歌われつづけることがなかったのは、まさにその歌詞の以上のような性格の故であつたらう。その歌詞は「柴田はこの歌詞から見ると、桂園派の歌人だつたか」と言われるように、まことにみやびやかなものではあつたが、小学生、それも初学年の児童たちが歌うには必ずしも適切なものであつたかどうかには疑問の余地が残るのである。

(注2) 金田一春彦、安西愛子編《日本の唱歌(1)明治篇》(講談社文庫A三六八)二七ページ。

じっさい、この小学唱歌は、この歌詞によつては明治時代後半には次第に歌われなくなったものと思われるが、その最大の理由は作られた目的と歌詞の内容、あるいはむしろその表現様式の間には大きな乖離がみられたからではなからうか。

なぜなら、この《見わたせば》の音楽的要素、すなわち旋律は、この小学唱歌のかたちを離れても、なお同時代にも別のかたちで歌われつづけたばかりか、その後も生きつづけ、すでに日本に輸入されてから一世紀を越えた現在でもなお親しまれつづけているからである。

明治時代で注目されるもうひとつの、あるいは奇異とも言う

るかたちは軍歌としてのそれであろう。明治二十年代から三十年代にかけて、軍歌としての《見わたせば》が歌われ、奏された有様はすでにくわしく論述したが、軍歌なるジャンルはそれが生み出される背景としての時代と密接に結びついており、ほかならぬ軍歌《見わたせば》は日清戦争を背景に生み出されたものである。軍歌作製の気運は日清戦争以前から次第にたかまり、戦争勃発によって当然ピークに達するのであるが、そうした動きの中で、《ルソーの夢》の旋律が、小学唱歌《見わたせば》の歌詞のいわばパロディとしての戦闘歌のテキストを伴なって、軍歌として登場し、あまつさえ明治天皇の《御下問》まで引き出したこととは興味深い。

だが、軍歌はすでに述べたようにかなり純粋な機会音楽の範疇に属するものである。したがって、この軍歌のかたちでの《見わたせば》あるいは《ルソーの夢》の生命が明治二十年代後半から三十年代と、他のかたちよりもはなはだ短かったのはむしろ当然のことであつたらう。

小学唱歌、あるいは軍歌としての《ルソーの夢》以上に長い生命を、明治初年から昭和初年にかけて享受してきたのが、ほかならぬ讚美歌としての《ルソーの夢》であつた。欧米においては《ルソーの夢》、あるいは《ルソー》、あるいは《グリーンヴィル》

と呼ばれた讚美歌は、これもすでに縷々論してきたように小学唱歌としての《ルソーの夢》、すなわち《見渡せば》に先立って、

日本のプロテスタント教会で歌われはじめたものであつた。それは明治七年ないし明治八年という早い時期であつたが、この旋律が《見わたせば》のテキストにアダプトされ、小学校初年生の愛唱歌としてしだいにひろく日本中に伝播していったのと平行して、明治二十年代、そして三十年代には、讚美歌としてもかなりの普及を見る。二十年代の《新撰讚美歌》、そして三十年代の《讚美歌》のような統一的な讚美歌集に収録されて、各派の教会で歌われつづけ、さらに三十六年版の《讚美歌》の新版ともいふべき大正九年の《縮刷讚美歌》にいたるのである。これらの讚美歌集によって、昭和の初年まで、この旋律がへかみよみめぐみをおよびへわがおほかみよの歌詞で歌われてきたのであつた。昭和六年版の《讚美歌》で長年に互つて讚美歌としての位置を確保してきたこの旋律がついに姿を消したのは、この旋律が他のかたちで人びとに歌われすぎたためと思われる。小学唱歌として、軍歌として、人びとの口ずさむ旋律は、明治末期にいたつて、今度は幼稚園で幼児たちが手足の運動を加えて、無心に遊戯し、唱和する幼な子の歌とさえなつたのである。こうしたかたちで教会外部で有名になつた旋律を、教会の立場から、讚美歌としてさらに位

置つけつづけることはむしろ困難であつたのではなからうか。

以上のような経緯で、『ルソーの夢』は、日本においては、爾後、もっぱら幼な子の歌『むすんでひらいて』のかたちで歌われつづけているのである。そしてこの『幼な子の歌』としての地位は今後もゆるぐことなく、この歌は、この旋律は歌われ、また遊戯されていくことであらう。

ここで『ルソーの夢』の曲としての、音楽としての特性をもういちど簡単に整理し、まとめておくことにしたい。

小学唱歌、讚美歌、そして児童歌としての『ルソーの夢』の旋律は導音を欠いたオクターヴの六音から成っている。明治十四年（一八八一年）に公布された『小学校教則綱領』には唱歌教育の内容容上の規定が『小学各等科程度』のなかで次のように示されている。

「初等科ニ於テハ容易キ歌曲ヲ用ヒテ五音以下ノ単音唱歌ヲ授ケ中等科及高等科ニ至テハ六音以上ノ単音唱歌ヨリ漸次複音及三重音唱歌ニ及フヘシ凡唱歌ヲ授クルニハ兒童ノ胸隔ヲ開暢シテ其健康ヲ補益シ心情ヲ感動シテ其美德ヲ涵養センコトヲ要ス」^(注3)

(注3) 山住正己著『唱歌教育成立過程の研究』(昭和四十二

年東京大学出版会) 四ページ。

『小学唱歌集 初編』はその『第十』の『春風』、『第十一』の『桜紅葉』、そして『第十二』の『花さく春』において、ようやくハからイまでの六音が用いられ、『見わたせば』は六番唱歌としては四曲目の作品であるが、『初編』のこの段階ですでに『小学校教則綱要』の『初等科』の制限を越え出したことになるわけである。

この六音という音範囲が、この歌の歌唱上の容易さをみちびき、児童、幼児たちが唱歌することを可能にしていることはもちろんである。私たちは『ルソーの夢』の多様なかたちについて見てきたのであったが、その最初のかたち、すなわちクラーマーの変奏曲の主題がハ長調をとっていたことを記憶している。それでは今まで吟味してきたこの『ルソーの夢』の多様な稿、さまざまなかたちの中で、一体何調が使われていたであらうか。この点での調査は、ハ長調からト長調まで、すなわちハ長調、ニ長調、ホ長調、ヘ長調、そしてト長調の五つの調が用いられていることを明らかにしている。もっとも頻繁に使用されているのはハ長調とハ長調であるが、こうした使用調を五度圏で見ると、フラット系統はハ長調だけであり、あとはハ長調より右廻りのシャープ系統で、ト長調(シャープ一つ)からホ長調(シャープ四つ)ま

であり、イ長調（シャープ三つ）だけが欠けていることになる。ほとんどがヘ長調かハ長調をとっているが、たとえば讚美歌ではホ長調やニ長調も見出される。ニ長調をとっているのは、ほかに《戦鬪歌》である。《大東軍歌》の原曲はハ長調であるが、《新編教育唱歌集 第二集》に収められた稿はニ長調をとり、いっそう軍歌的な勇ましさをの傾向をつよめている。

拍子については、原曲の二分の二拍子のほか四分の四拍子、さらに四分の二拍子と二分の四拍子が見られる。この拍子とも関連づけられるのはテンポの問題であろう。クラマーの変奏主題、すなわち《ルソーの夢》の原曲は《モデラート》をとっているほか、たとえば《不在》のような恋愛歌曲では《アンダンテ》のような指示が見られる。しかしながら《ルソーの夢》がひろく巷間に流布したのは讚美歌、児童歌（遊戯歌）、子守歌、あるいは民謡化されたかたちであった。こうした種類の音楽ではあらためてことさらにテンポの指示はおこなわれていない。したがってこの旋律はその歌の種類によって、はやくもおそくも歌われるのである。子守歌はまことにゆっくりとしたテンポで歌われるのが当然であろうし、一方、軍歌は確固とした早目のテンポが要求されることだろう。その両極の間に讚美歌や児童歌が位置づけられると考えられよう。

こうした音楽上の特徴を備えた《ルソーの夢》の旋律は、けっして非凡なものではない。その音の動き、すなわち旋律線はあくまでもおだやかである。この旋律がルソー原曲といわれる所以はすでに詳細に論じたが、ルソー原曲といわれる所以はすでに詳細に論じたが、ルソーの《村の占師》の《バントミム》に見られる《ミー・ファ・レ・ドー・ドーの動きは、クラマーの《ルソーの夢》の主題の音の動き《ミー・ミ・レ・ドー・ドー》に変えられることによって、その性格をかなり変容させたものと考えられる。旋律線は均なげられておだやかなものとなったが、その変容は、個性的、芸術的な舞曲の旋律から民衆的、民謡的な歌の節たへの変貌といふべきであろう。だがこの変容、変貌がこの旋律に新しいユニークな性格を賦与したことはうたがいない。

それは芸術的ではなく、ポピュラーであり、単純ではあるが、逆に歌いやすく、口ずさみやすい性格とどのようなテキストの内容にも適応できる可塑性、順応性ともいふべき性格を有しているとともに、加えてもうひとつの重要な性格を備えている。それは聴く者の耳によって容易に捉えられ、一度聴いたらけっして忘れることができなような性格である。すなわち人びとの記憶に刻みこまれるという性格がそれである。こうした特性に、この歌が日本で最終的なかたちで定位置した幼な子の歌としてのあり方、

すなわち音と身体運動、仕草との有機的な関連を加えて考えるとき、私たちは、この歌が、まことにルソー的な音楽のあり方を実現していることに気づかざるを得ないのである。

《告白》の第一巻が語っているように、ルソーにとって、母親代りの独身の叔母シュザンヌ・ルソー、すなわちヘジュン叔母さん^(注4)が歌ってくれた歌、ロマンスは、その旋律が幼な子ジャン・ジャックの記憶の奥底に刻み込まれたばかりでなく、それは彼の〈音楽への趣味〉、いなむしろ〈音楽への情熱〉を呼びさましたものであった。^(注4) 初源的な感情体験としての音楽の聴取、歌の記憶。それはルソーの個人的な体験であつたばかりでなく、およそ人間すべての生々しくもまた普遍的な感情体験のかたちではなからうか。

(注4) ジャン・ジャック・ルソー《告白》(白水社版《ルソー全集》第一巻・小林善彦訳、二〇ページ—二二ページ)

このルソーの体験は、やがて〈記憶の記号〉としての音楽というルソーの思想に発展展開することとなるだろう。^(注5)

(注5) Jean-Jacques Rousseau《Dictionnaire de musique》1768.

三三四ページ—三三五ページ。

そのルソーは教育論として名高い《エミール》第二篇で次のように語っている。「旋律はいつも歌いやすい単純なもので、いつもその調の基本的な和弦から出ていて、いつも低音をはっきり示し、子供が苦もなく聞きとり伴奏できる、そういうものでなくてはならない。」^(注6) ルソーが幼な子が歌う歌は〈情緒的〉^(パティシヤン)なものであつても、また〈表現的〉なものであつてもいけないと考えるのは、こうした種類の歌は、大人の、成人のものであり、オペラの劇場的、芸術的なものであるからである。またルソーはその小説《新エロイズ》の中で、田舎で仕事をする人びとが歌う民謡について語っている。「それらの歌は、大部分古い恋歌^(ロマン)で、曲はびりりとしたところがありますが、何か知ら古代的で甘美なところがありまして、それが遂には人の胸を打つのです。」^(注7)

(注6) ジャン・ジャック・ルソー《エミール》(平岡昇訳、《世界の大思想17》河出書房、一四四ページ)

(注7) ジャン・ジャック・ルソー《新エロイズ》(四)(安土正夫訳《岩波文庫一〇八一》四四ページ)

技巧によって、芸術によって完成される、いなルソー的な表現を用いれば損なわれる以前の、初源的な、本源的な歌の在り方についてのルソーの主張を、ここでくわしく論じている余裕はす

に失なわれてしまったが、^(注8)以上のようなわずかな引用や説明によっても、ルソーの捉えた人間の本来の歌の姿が、この論稿の主題であった《むすんでひらいて》、溯って言えば《ルソーの夢》のかたちと二重写しとなることは明らかであろう。ルソーの音楽劇に収められたオリジナルな舞曲の旋律は、ルソー的な歌の、ルソー的な音楽の姿かたちを、時間と空間の中で、すなわち十二世紀にもおよぼうとする歴史と、地球全体にもおよぼうかという地域のひろがり、西洋と東洋、あるいはさらにアフリカといった大陸や島々で直観的なかたちで示すべく、《ルソーの夢》に整容し、ルソー的なそのあり方を、人びとの口からほとぼしらせ、また人びとの耳に、心に鳴りひびかせたのであり、今もなお幼な子たちがこぞって歌いつつ、たわむれているのであるが、それは未来にあってもおそらくいつまでも変わることはないだろう。

(注8) この点については海老沢敏《ルソーの夢とルソーの音楽の境域》(《有馬大五郎先生喜寿記念論文集》収載予定)を

参照されたい。

||了||

(国立音楽大学)

※

※

※

倉橋惣三への一つの接近（その二）

——「たけくらべ論」に見られる「子ども観」の多層性——

本田 和子

(3) 「たけくらべ」の舞台空間

① 「大音寺前」をめぐる

「たけくらべ」を論じる人々が、等しく言及の対象とするのは、その作品の舞台となった「大音寺前」の、環境としての特殊性である。「美登利」という主人公が、「遊廓」という特殊な空間との結びつきにおいてのみ存在し得る個性であり、作品世界のない手である子どもたち一人々々も、また、この独特な土地の

申し子であってみれば、「大音寺前」を抜きにして「たけくらべ」を語り得ないのは、当然の経緯であった。

しかも、先ず、「大音寺前」という固有名詞を指示して作品空間を出現させることにより、物語の幕が明けられるのだ。すなわち、人口に膾炙した冒頭の数行がそれである。「廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の往来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は広くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申しき^{*1}」

こうして、最初に実在の地名を「言葉の世界」に移しかえるこ

とにより、現実の地理的空間の一部を物語空間として切り取り、虚構の次元に移行させる。そして、そこに紡ぎ車が据えられ、物語の糸が紡がれ始める。こうした展開のしかたは、一葉の他の作品と比しても、一つの特色として扱えられるのではないか。例えば、「大つごもり」の場合、女主人公お峰の奉公先である山村家が、「白金の台町」と知れるのは、物語の半ば近くであり、また、「十三夜」においては、物語の前段の舞台である斎藤家が、「上野の新坂下」とその所在を明きらかにするのは、物語が折り返し点を過ぎてからなのである。

こう見てくると、「大音寺前」は、作者自身にとっても、「たけくらべ」という作品世界を出現させる「絶対の場所」であったと言えそうである。山村家は、豪壮な邸宅を置いておかしくない土地であれば、「麴町」でも「高輪」でもよかったであろうし、また、斎藤家は、つつましい勤め人の借家住まいにふさわしい町すじなら、どこであっても大差はない。然し、「たけくらべ」の舞台だけは、「遊廓」と「市街地」を結ぶ境界地帯、この「大音寺前」以外のどこでもあり得なかつたのである。

「たけくらべ」は、関良一がいみじくも指摘したように^{*2}、「吉原物語」であり、しかも、「吉原へ入る物語」であると同時に、「吉原を去る物語」であった。「吉原遊廓」は、作品世界の求心力

と遠心力の中心として、子どもたちをそれぞれに呪縛している。その結果、「美登利」は、お歯ぐる溝に囲まれた暗い円の内側に吸収され、「信如」は、それらのすべてに背を向けて遠くへ去る。こうして、主要な人物の二人が、各々、吉原の「内と外」へ袂を分かつたとき、物語の幕が降りる。これが、この「吉原物語」の必然なのだ。遊女の卵と僧侶の卵との共存は、そしてこの二人の幼い恋は、「廓」という非日常空間と、「庶民の生活の場」という日常的空间との境界に位置して、そのいずれにも属さない「大音寺前」を舞台とするときにのみ、可能だったのである。

ところで、倉橋もまた、「大音寺前」への目配りを忘れてはいない。すなわち、「歴史は地理を知らなければわからぬ。人間の心理生活はその外国環境を知らなければ理解せられぬ。況して子供の生活をや。ことに一種特別な環境の内にある『たけくらべ』^{*3}の子供達をや」という書き出しで、彼の「たけくらべ論」は、始まるのだ。

心理学者の常として、倉橋の意識は、「大音寺前」を、子どもらに「独特な影響を及ぼす生育環境」と把握し、「たけくらべ」の子ども群像を論じるのに、看過し得ぬ要因と位置づけた。にもかかわらず、自身の足で探索を試みた彼の視線は、何よりも先に、「大音寺前」の変貌ぶりに吸い寄せられてしまう。原文に、

「三島神社の角をまがりてより、これぞと見ゆる大厦たいさもなく」⁴と書かれたあたりの家並の建て込み、燈火のうつつた筈のお歯ぐら溝は、「あるかないかわからないような小溝せうこう」⁵に変わってしまったている。美登利が朝参りをした中田圃の稲荷や、正太郎に行き逢った睦路など、今はその面影もない。江戸の周縁に位置して、市街地から隔たる土地であったからこそ、「遊廓」の所在地として選ばれたのであろうに、不断に拡張を続ける東京という大都會は、空地を求めてあらゆる間隙に食いこんできている。そんな時代の動きに、倉橋は、先ず、目を奪われたのであった。しかも、それは、「たけくらべ」が書かれた明治二八年から、倉橋が「たけくらべ論」の筆を執った四五年までの、僅か十数年間の出来事であった。

前田愛も、その「たけくらべ論」⁶の中で、二枚の地図を併記して、この変貌ぶりに注目している。すなわち、明治一三年の地図の上で、「大音寺前」を含む竜泉寺村は、まだ一面の水田であった。そして、島のように浮かぶ「吉原」と、金杉をつないで、「大音寺前」の街すじは、細い橋のように見える。然し、明治四二年の地図において、竜泉寺町は、びっしりと人家で埋まった市街地と化している。かつての水田は、僅かに、散在する大小の池として面影をとどめるだけだ。

前田は、この急速な都市化をふまえて、一葉が作品の舞台に選んだ頃の「大音寺前」は、膨張過程の丁度中間に位置して、極めて不安定な時期であったと把えている。すなわち、半農村的景觀が次第に失なわれ、「ムラ」の習俗が、「都市」のそれに変わりつつある時代なのだ。そこで、前田は、物語の開幕を飾る千束神社の夏祭を、鎮守神を中心に結ばれた農村的体質の象徴とみなし、ムラの記憶がよみがえってくる一日であると言う。とするなら、逆に、終幕を彩る大島明神の酉の市は、特定の氏子を持たぬ金錢の神の祭りであり、そのゆえに、マチ的、吉原的祭礼と位置づけられよう。その結果、「こうした二つのマツリがつくりだす位相の差は、子どもたちの世界にも波及する。夏祭の宵に表町組、横町組の旗じるしをかかげて競いあった大音寺前の子ども集団は、酉の市の夜には結束を解いて分散し、人出をあてこんで小遣いほしさの俄か商いに精出すことになる」⁷のだ。

美登利の「子どもの時間」は、こうして、子ども仲間が解体した酉の市の賑わいの中で終りを告げ、大音寺前の「子どもたちの時間」も幕を降ろした。そして、いま、私どもの視野に、それらは、一きわの哀切さを帯びて浮かび上ってきている。何故なら、農村が都市へと変貌を強いられる激動の時間と、子どもたちの成長の時間が重ね合わされ、崩壊していく村落共同体の運命と、子ど

も集団のそれとが重ね合わされる。こうして、作品世界の隠された構造が掘り起こされるとき、子どもの眼は、言葉の背後を透視する力を獲得し、結果として、あんなにまで輝いていた「子どもたちの時間」を、無惨に奪い去ったものは一体何であったのか、という問いが、重く心に沈むからである。

ところで、先に触れたように、倉橋もまた、「大音寺前」の姿貌に目を見張った。然し、作品に対するこのような深い読みは、文学研究者ならぬ倉橋の持ち分ではない。従って、彼は、ただ「人家稠密の横小路」に戸惑いながらも、その中から「遊廓近い土地柄の気分」⁹、だけを引き出そうと試みる。彼の意識は、「大音寺前」を、子どもたちの個性の中に「ある共通の色合い」¹⁰を帯びさせる独特な環境とのみ把握し、それを、ひとえに「遊廓」との距離に収斂させるのだ。

こう見てくると、私どもは、次のような興味深い事実¹¹に気付かされる。すなわち、倉橋は、「大音寺前」と、二つの異った層で出会っているのではないか。一つは、「吉原物語」の舞台としてであり、いま一つは、近代という波に翻弄される大都市周縁部の象徴としてのそれである。言うまでもなく、彼が自覚的に把えたのは前者であった。後者に関しては、出合いの驚きだけが表明されていて、それ以上の取り組みは見られない。しかも、彼は、変

化を見据えることを避け、慌しく過去の経験の中に遡行する。つまり、明治二八年頃に、その畏限で遊んだことがあるという、自身の追憶に立ち戻るのだ。

ここには、経験科学者としての倉橋の面影が、ほの見えてい。と、同時に、近代化への不信が、未だ、その席を得ていなかった二〇世紀初頭という時代の横顔をも、垣間見ることが可能である。いずれにせよ、倉橋は、作品の舞台空間と、意識的、無意識的に、上記のような出合いを持ちながら、それぞれの子ども像に論を進めて行くのである。

② 倉橋の「場所」

一般の倉橋論について、彼は、その一生を通じて「陽の当る道」を歩んだ人物とされている。確かに、府立一中、旧制一高、そして東京帝国大学という彼の履歴は、いわゆるエリートのものであり、三〇に満たぬ若さで、東京女高師という官学に職を得て、時をおかずに保育界の指導者の地位になったというその歩みは、一見、恵まれようであったかのように思える。そして、彼自身も、その自伝的随筆集「子供讃歌」¹¹において、いとも幸せそうに、その順調な歩みの跡を回顧して見せるのだ。

然し、皮肉なことに、その同じ「子供讃歌」が、散見される幾つかのエピソードを通して、倉橋の上に注がれた光が、彼自身の自覚を超えて、極めて微妙な、独特の色合いを帯びていたことを、秘かに囁きかけてくるのではないか。例えば、彼は、一高の寮生活の中で、「武道もせず、野球もせず、ストーム仲間にもはいらない」^{*12}はずれ者であった。また、帝大生としては、「帝大教授学生気質」^{*13}の中に、幼稚園通いばかりしている「変り者」として登場していた。もちろん、倉橋自身の回想の中で、それらすべては、陽の側面から肯定されている。一高時代の異端ぶりにしても、彼はその理由を、「どっちかといえ、おぼっちゃん育ちの方で」^{*14}「い、わばおとなしい青年であった」^{*15}からと説明し、「学生気質」中の文章も、彼の子ども好きを「面白おかしく」^{*16}紹介したものと、極めて好意的に引用しているのである。

内村鑑三に心酔し、ワーズワースに傾倒した若き日の倉橋は、確かに、世俗的な栄達を超えて、人間としての美と真に憧憬するロマンチストであったに相違ない。そして、彼の周囲には、傾向を同じくする友人たちがいて、彼の夢を包んでくれたもののようなのである。例えば、倉橋が幼稚園から貰ってきた粘土製の人形を、「表紙の破れたレクラムのそばに置いたりする、入浴ぎらいの男」^{*17}や、将来は牧場を経営して、その中に幼稚園を建てようと、共に

「メドウ・キンダー・ガルテン」を夢見た友人などがそれである。従って、倉橋自身の自覚的な意識の世界では、よき理解者たちに包まれて、彼の「子どもとの道行き」は、常に、幸せであったと言い得よう。

然し、先にも触れたように、彼が選んだ道は、明きらかに、「はずれ者、変り者」のそれであった。倉橋は、周知のように、オーソックスな「心理学者」でもなく、また、「教育学者」でもなかった。彼が住まいを定めたのは、「幼児保育」という未開の地しかも、学問の世界に位置づき得るか否かも定かではない、あやしげな土壌だったのである。

子どもを育てる営み、特に、幼い者へのそれは、人類がその歩みを開始して以来、何らかの意味で大人たちの課題となり、何らかの形で、それらの解決が試みられつつ、今日に至っている。人間の赤ん坊が、他の動物たちのいずれにもまして、他者による養育を絶対条件とし、極めて依存性の強い存在としてこの世に出現する以上、それは、人間の大人の従事すべき不可避の営みであった。そのゆえに、また、幼い者の養育は、すべての大人たち、性別が分化した社会ではしばしば、大人の女たちだったりするのであるが、彼女らの誰でもがかかわりをもつ、当り前のことがらとして処理されてきた。赤ん坊が生まれれば、乳を吞ませ、着物を着

せ、彼らが歩き出し、もの心つくようになれば、物事の道理や秩序を教え、時には遊び相手をつとめ、とにかく、それぞれの社会において「一人前」と認められるまで、世話をし、援助するのは、当然のことだったのである。

考えてみれば、育児行為は、人という種の保存、及び、その文化の存続という見地から見ても、言うまでもなく、最も根源的・基盤的な営みに相違ない。然し、余りにも根源的・基盤的でありすぎるために、そして、誰でもが従事する日常的な営みであるゆえに、学問や思索の対象とされ難い性格を持たされてきた。「食べること」や「着ること」が、極く最近まで学問研究の対象となし得なかつたように、そして、現在と言えども、十分に根を張っているとは言い難いように、「育てること」も、大学アカデミズムの中には位置づき難い領域であつた。倉橋が選びとつたのは、そんな「場所」だったのである。

倉橋は、彼の興味を引きつけて止まない幼い人たちのとりことなり、たまたま出会つた「ペスタロッツ伝」に陶醉した。彼は、「子ども」と「ペスタロッツ」の両者を、風に運ばれて自身にもたらされた恩恵と受けとめつつ、子どもの世界への傾斜を深めていった。従つて、倉橋にとつて子どもとは、学問研究の対象である前に「生きた事実」であり、特定の理論や方法では押し難い存

在であつた。結果として、彼の立つ「場所」は、大学アカデミズムから、ますます遠ざかつていかざるを得ない。倉橋の児童研究が、オーソドックスな学問研究の世界で正当に評価され難く、中樞に位置を占め得なかつたのは、改めて考えるまでもなく、当然の経緯であつた。彼に与えられたのが、学生時代と同じ「変り者はずれ者」の「微」だつたであらうことも、想像に難くない。

こう見てくると、倉橋の上に、常に陽光が降り注いだというのでも、「保育界」という狭く限られた領域の中だけの現象ではないか。そして、「保育界」及び「保育研究」とは、学問の側から見ると、遙か辺境に位置する「しがたない領域」であり、科学と通俗的な常識との境界にあつて、そのどちらにも属さない、「あいまいな分野」に過ぎない。天下国家を慮る経世の学や、事象の極限を追求する真理の学と、同列に論じられよう筈もない。そもそも、「子育ての実際」など、格別の教養も知性も必要としない、婦女子の営みだつたのであるから。

③ 「大音寺前」と「保育界」

こゝで、私は、次のような、一見、奇矯とも思える対応を試みたいと思う。すなわち、「たけくらべ」の美登利が女王として振

舞った「大音寺前」と、倉橋が君臨した「保育界」を、重ね合わせて見ようというのだ。「大音寺前」が、「遊廓」と「庶民生活」を結ぶ橋であるなら、「保育界」もまた、「学問」と「通俗的生活性」の境界に位置している。「遊廓」が、日常性を拒否して「反俗の聖性」を堅持したように、「大学」もまた、アカデミズムの名の下に庶民生活からみずからを隔て、「非日常的聖域」たろうとする。日常性を「俗」と見るなら、両者はいずれも「聖」の徴の附さるべき特別の世界なのだ。従って、「大音寺前」と「保育界」は、共に「俗」と「聖」の境界にあって、構造的に同じ位置を占める。

「たけくらべ」の子どもたちが、美登利を接点として「吉原」のおこぼれにあずかったように、「保育界」の人々もまた、倉橋を介して「アカデミズム」の風に触れようとした。しかも、「たけくらべ」の子どもたちが、世間一般の与える蔑みのしるしに気付くよしもなく、ただ毎日を遊び呆けていたように、「保育界」の人々もまた、蔑視とまでは言わずとも、必ずしも正当に評価されてはいないことなど意にも介さず、ひたすら、子どもらとの日々を過ごしている。そんな彼らの中心に、「美登利」は、そして「倉橋」は、君臨していたのだった。両者は、ここでもまた、見事な重なりを見せると言えそうである。

然し、美登利は、自身の体に刻印された「はずれ者」の「徴」に露ほども気付かず、得意満面と女王の座にあったとしても、倉橋は、知識人の常として、己れの住まいする「場所」の辺境性に全く無感覚であり得たとは思えない。むしろ、「保育界」という地盤の脆弱性を、誰よりもよく知っていたのは、彼自身だったのではないか。例えば、倉橋は、当時を回想して次のように語っている。「大学には保育を講ずる者はいないし」^{*19}「彼は思うこと疑うことをだれにきいてもらいようもない、あわれなよるべない保育理論研究者であった」^{*20}と。そして、「フレイベル会例会が、月々開かれ、また、夏期講習が催されたりして、それ相当の、地味な歩みはつづけられていたが、何分、大きな東京のなかの、小さな幼稚園界というふうを免れなかった」^{*21}と記している。こうして、倉橋は、自身の着手した営みが、足もとも覚束ない不確かな地盤に、独力で家を建てるような孤独なそれであることに、気がかざるを得なかったであろう。

にもかかわらず、人々の眼に、倉橋は運命の寵児とうつり、また、彼自身の「子供讃歌」も、常に冴え冴えと陽的な音色を響かせる。私どもは、そこに、彼の秘やかな「演技」と「虚構」の跡を見出すことが出来るのではないか。それは、言うまでもなく、他者をあざむこうとか、事実を糊塗しようとする、意図的な

「演技」や「虚構」ではない。人が、他者の期待や夢に、誠実に答へようとするとき、自ずから出現する根源的な「演技」であり「虚構」なのだ。そして、それらは、仮に、世間一般から、或いは、「大学アカデミズム」から、周縁に追いやられ軽侮の視線を注がれたとしても、自身の選択に悔いる余地はないという自負と、周囲の保育者たちの熱いまなざしに支えられていた。そのゆえに、倉橋は、自身に刻印された「はずれ者」の「微」を、恥じる必要はなかったのである。

然し、倉橋の「たけくらべ」への関心と、「美登利」に寄せる格別の愛着は、そんな彼の、表に現われ得なかつた分身の存在を垣間見せる。自身の位置する「場所」と「大音寺前」のこの重畳性、両者は共に「境界」なるがゆえの両義性を背負い、共に「近代」という嵐に翻弄されることによる不安定性を抱えこんでいる。それらがお互いに照応し、共鳴し合う秘やかな気配に、彼の無意識は鈍くあり得なかつたのである。

(つづく)



倉橋惣三選集第四卷所収 フレーベル館

* 6・7 前田 愛 「子どもたちの時間」 「樋口一葉の世界」所収

平凡社選書

* 11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21 倉橋惣三「子供讃歌」

倉橋惣三選集第一卷所収 フレーベル館

* 1・4 樋口一葉「たけくらべ」角川文庫

* 2 関 良一 「樋口一葉 考証と試論」有精堂

* 3・5・8・9 10 倉橋惣三「一葉女史の小説に現われたる子供」



柳田為正

J・W・S・プリングル著（小原秀雄訳）

「生物学と人間科学」（三共科学選書 三共出版）

一九七八年発行

緑蔭の読みものとして、ときにはちとハードな、手ごたえのある一冊も悪くはないだろう。そう思って、海外の碩学たちのくつわを並べて大いに論じている右の書を取り上げてみました。

この本の読み手には、二つの課題が重なり合っています。

す。一つはいうまでもなく書物の内容をなす本来の主題そのもので、これについては以下に紹介を試みます。いま一つの問題は、翻訳書と取りくむという例の難儀な問題です。この方についてまず一言したいと思います。翻訳の問題は、実は当の訳者自身がまず取り組まねばならぬ問題だったわけです。広く世界の思潮・論陣に接するためには、言語の障壁を乗り越えねばなりません。それがこの日本ではおたがいに相変わらざるの難関となっているのです。

翻訳というわざは、いわゆる「語学」力ないし欧文和訳力だけの勝負ではなく、この本の訳者も、れっきとした学

識者の身をもって、訳業の苦難を「あとがき」で告白されています。訳者がかりにそのようであれば、読み手は一層のこと難渋する道理です。しかもなおこの難関こそが、知的鎖国状態を逃れるための唯一の通路なのです。明治期は文字どおり翻訳の時代で、それだけに言語・学力ともに一級の人材がみずからこの業に当たりました。当節ではどうやら（いまのこの一冊は違いますが）大先生たちはいわゆる「監訳者」の座に据わり、実際の訳業は駆け出しの門下一同が分担下請けに当たるといふ例が多く、責任の所在や不分明、出来栄えも冴えぬというものがままあります。

従って読者の方も訳本ときけば始めから通読・熟読に堪えぬしろものと心得、一冊買って手もとに置くだけの安心感という効用しか期待しない向きもあるようです。書物が本来の役目を果たしていないことになります。

そういうわけで文化伝達上の難関は、いまも依然として難関。その点衣料や装身具といったたぐいの有形文化は、いとやすやすと伝播してきます。学問の分野でも、実験諸科学の技術や情報などは、現場第一線の若手たちが身につけて、交流もジェット機なみの速やかさですが、表記の書物の主題のような多少とも奥行き深く問口も広いじつくりし

た思索を要求するような分野では、右の難関がこの国を世界地理上の位置以上に隔離してきている実状が感ぜられます。書店に並ぶ新刊書の背表紙のみいたらずに輝かしく、知識・思想上の実質的歩どまり率は、決して思わしくないのです。

さてそろそろ第一の方の本来の主題に進まねばなりません。言語障壁の問題に紙数をとられたのも、とくに表記の書の場合、その内容の充分な理解と、そしてその上での取捨が、目下われわれにとり切実な急務と思われるからこそ焦燥に出ずるものです。主題はまさに書名の示すとおり。「人間科学」とは human sciences の訳語です。自然と「人文」（社会を含め）、この両分野の組み合わせは、もはや在来の「お座馴れ」流のそれではなく、格段に具体的なそれとして日程に上ぼる時期に達しているのです。これは生態学、行動学、進化生物学、集団遺伝学等、主として生物学・人類学の側での進歩によるものですが、そうした「人間科学」の学際講座がオクスフォード大学に新設されたとき（一九七〇年）、その機がすでに熟しきっていた状況を、右講座主任プリングル教授は、本書の序文中に述べています。この論集自体は別途同大学に七十年の歴史をも

つ「ハーバート・スペンサー記念講座」(右と同年度)からの所産で、六人の講師が論陣を連ねての盛観です。

第一講はハインド「攻撃」。演者はケンブリッジ大学の行動科学担当教授。その主著「行動生物学——ヒトの社会行動の基礎」上・下は、昨年訳書(講談社)が出ていて、うち一章はまさに同一主題に当てられています。ほかに大ロレンツの同名の著書「攻撃」が、これはみずず科学ライブラリーから訳出されています。さてハインドの論旨ですが、さつそくにも訳者・読者ともに難渋する三十ページ。攻撃(アグレッション)とは各種の動物で、同種個体間にいろいろな場面でみられる排除的行動をさすものですが、「殺し」にまで到る攻撃はヒトという動物だけの専売特許だというような知識は、すでに世上にも普及しています。演者は前段でまず動物界での攻撃の諸例につきその機構や意味を論じ、後半部でヒト社会(とくには一九七〇年当時のヤングたち)にみられる攻撃の問題に転じます。前半部では、後述のウィン・エドワーズ教授の所論への反駁なども主眼の一つで、なわばり行動としての攻撃での敗者側を例の「利他的行動」に含めることの行き過ぎを衝いたりし

ているあたりは、どうやら読みとれます。攻撃は動物界ではそれぞれ然るべき適応的価値をもつものに違いないとして、それがどのようにしてヒトにまで継承されているのか、ヒトではどのような個体的・社会的効果を演ずるのか、といったかんじんの点の論議が、言語障壁に阻まれ、読者に伝わってこないのが残念で、いっそ原書に就いてあらためて勉強をと一念発起する読者も出てきていいと思います。

第二講 グルベニック「人口増加の抑制」。演者は人口動態学専攻。パークシアの公務員養成大学教授。「人類を存続させたいならいまますぐにも人口増加率をゼロに引き下げることが必要」という生物学的に自明の前提から、この講義は始まり、以下終始これが実現に向けての諸般の現状データ、具体的問題点、解決策等を克明に検討します。産児数の切詰めに伴なう女性の社会的役割りの転換の問題なども、まともに取り上げているのが印象的です。

第三講 ウィン・エドワーズ「社会倫理の生態学と進化」。この演者が、第一講でハインド教授の槍玉に上がっ

た当人です。アバディーン大学の動物学教授。問題は前講同様動物やヒトの人口動態にかかわるもので、まず新旧両派のダーウィニストたちの見解の棚卸しから取りかかります。演者の自家の研究は、アバディーン近辺のヒース地帯のライチョウ個体群をモデルとするもので、これにはとくに一節を当てています。生物の進化的適応は人口の無限の増殖へ向かうものではなく、本来一定限界への自己調節能を内蔵するというのがその趣旨で、前記のなわばり制の「利他主義」などの言辞がとび出すのもそのかわりからです。これが終段ヒト社会の話に移ると、モーゼの十戒や社会倫理の進化的・遺伝的基盤の論議になります。例によって隔靴搔痒の行文が頻出しますが、比較的読みやすい一章です。

第四講 G・A・ミラー「生物学的過程としての言語による伝達」。ロックフェラー大学教授、大脳生理学者とみられるこの演者は、本講座の名称の主H・スペンサーがそのむかし言語の進化について「素朴な手まね足まねから近代科学まで」の足どりを要約したことへの回想から切り出し、末尾を再びその同じ要約で結ぶまでの三十ページを、

過去七十年間の関連諸分野における進歩の所産で充実させています。チンパンジーの記号言語能力についての知見なども、そうした重要な寄与の一つです。言語に特有の「単一目的」学習メカニズムを強調するチョムスキーの立ち場に対しては、慎重な態度を持っています。猿人段階の集団狩猟者たちに始まる音声交信、そしてそれが伝達する文化それ自体が、人類の脳と言語の急速な進化への淘汰圧の基盤となったという論旨が、例の言語障壁に阻まれつつも博識かつ慧眼に説かれています。

第五講 ダーリングトン「人種・階層・文化」。当時すでに古稀に近かった植物染色体学の大御所（オクスフォード大）の引っ提げて登壇したスペンサーも顔負けの大テーマです。石器時代から現代に及ぶ世界の人類文明史を、遺伝と進化の視点から縦横に論じています。聴衆を煙に巻く長口舌に似て、しかも随所に今後へのまともな実質的課題を提起しています。少なくともこの一講だけは、あらためて原書をテキストとしての自主ゼミなどに取上げるねうちがあります。

第六終講の真打ちはドブジャンスキー「人類進化の独自性」。六講師中最年長、この講演の五年後に七十五歳で他界したカリフォルニア大学遺伝学教授。生物学者ならこの演題をみただけで、その内容や解答のあらましに察しがつくでしょうが、ただしさすがにこれは当代第一級の模範答案案なのです。ヒトという動物の独自性につき「人間は別の動物種ではあるが、まったく別の動物だというわけにはいかない云々」というシンプソンのことばが引かれています。このかんじんなくだりで訳文の意味が通じません。察するにこの「まったく別の」の原文は、*just another species of animal* あたりで、つまり「ただ、いま一つ別種の動物」というだけのものではない」という意味なのです。また中盤の一節の見出しが「遺伝学を超越する文化の遺伝的基礎」とありますが、この見出しでは遺伝学を超越するのは文化の方なのか、その遺伝的基礎の方なのか、どっちにもとれてしまいます。正解はもちろん前者の方で、人間の文化もその基礎はやはり遺伝的なのだというのが、大事な論点なのです。人間個体の行動的基礎についての例の「白紙状態」説も出てきますが、こここの所はとくに人文・社会系出身の読者に注目してほしいくらいです。他にも大事な論

点はいろいろある中で、例の動物行動上の「利他主義」についての演者の一言だけは、ちょっと気になります。子に対する母動物の利他的行動を、倫理的な意味での「利他」主義と混同する人は、いかに単細胞の生物学者にもいないと思います。しかもヒトの親の愛にいまなお生物学的基礎の残存することは、正直のところ否定できません。だいたい倫理だけでどうしてあのような強固さを保持できるものでしょうか。

最後に訳者が「あとがき」で綴られた感想を読んでこちらもいろいろ感じましたが、すでに紙数も尽きました。ひと口でいえば、戦後わが学界の置かれてきた思いのほかな文化的隔離状態への重ねての反省ということになります。

(お茶の水女子大学・生物学)

歴史と民族

福井憲彦

西ヨーロッパが築いてきた文明や価値観、あるいは近代化のありかたに対する批判の声が、西ヨーロッパ自身の内部からあがってくることは、かならずしも最近にのみ見られることではありません。「機械文明は、野蠻の最後の段階に來てしまっている」とかつて書き記したのは、フランス

スの著名な作家カミュであったように記憶しますし、さらに遡ってニーチェの存在を指摘することもできます。ところで、ことにこの十ないし二十年來、フランスの歴史学界に顕著な革新の動きもまた、ヨーロッパの近代化とそれをささえた価値観のヨーロッパ内部からの再検討、ヨーロッパ

中心主義的な歴史のみかたに対する、つまりヨーロッパ社会の発展の筋道になぞらえて、それとの距離や偏差でもってヨーロッパ以外の社会の歴史を捉えようとするみかたに対する、徹底した批判などを含んでいる点で、まことに興味深いものといえます。

もちろんそうした動きは、フランスやヨーロッパ内部に限ったものではありません。『脱病院化社会』（晶文社）や『脱学校の社会』（東京創元社）などの邦訳で知られるイヴァン・イリッチのように、第三世界との接点に位置しながら、現代社会への根源的な問いかけを続けている人の存在

を忘れることはできないからです。彼の問が根源的であるというのには、専門医療化や学校教育の問題を直接には取りあげながら、彼のまなざしと問いかけとが、常に現代社会全体のありかたにむけられているからにはかなりません。

フランスの歴史家たちもまた、いちばやく全体史とか社会史とかの表現のもとに、歴史を個別専門化や細かな領域区分の中に閉じ込めてしまうことに、ノンを言い続けてきたのでした。全体史とか社会史とかの表現は曖昧にすぎるといふ誇りがあるかもしれません。たしかに全体史というのは、歴史家にとって見果てぬ夢ともいえます。しかし、むしろそういう、多くの事柄を包摂しうる茫漠とした概念なればこそ、敢えて用いるのだというリュシアン・フェーヴルの言葉を引いておきましょう。もちろんそれは蒙昧主義を意味するものではありません。現在のフランスにおける歴史学の革新にとって、その先駆者のひとりとして導きの糸を与えたフェーヴルの考えについては、彼の著者『歴史のための闘い』（創文社）を読むにしくはありません。

このフランスにおける新しい歴史学の動向については、口にされるほどよく日本に紹介されてはいないのが現状なのですが、さしあたりル・ゴフ『歴史学と民族学の現在』

『思想』一九七六年十二月号）や、今秋刊行予定の、ル・ゴフとならぶもうひとりの代表的歴史家ル・ロワ・ラデュリの『歴史人類学への道』（邦訳仮題―原題は『歴史家の領域』―新評論）が、そのイメージをつかむのに役立つかと思われまます。それらの表題にもあらわれていますが、最近のフランス歴史学界における革新の方向のひとつの重要な点は、歴史学と民族学ないし、より広く言って人類学との協同、あるいは人類学的方法とまなざしとを持った歴史学ということにあります。もちろんそれ自体は、ただ歴史学にのみ関ることなのではなく、社会についての認識あるいは知の体系についての、全体的再検討という動きと不可分なのですが。

それは、近代化についてのわれわれの捉え返し作業にとつて、実は大きな意味をもっています。そこでは、人間と社会のありかたをその日常性において捉えること、人々の日常生活のありかた、家族や親族関係をはじめとしたさまざまな人間の結びつきかた、諸階層を成す社会的結合関係、人々の日常的な意識のありかた、慣習や習俗などを、過ぎ去った社会の中に問うことなどがめざされます。それは当然ながら、近代化が本格的に始まる以前、いわゆる伝

統社会の中で重い比重をもつことは言うまでもないわけですが、また近代化の波の中でも、しばしばそれへの抵抗要因という形で従来問われてきたことからわかるように、さまざまな歴史の変容を蒙りながら現代へとつながる問題でもありません。逆に言えば、もっぱら限定的な空間の中で存在してきた民衆の生活と文化の独自のスタイル（たとえば地域文化や地域経済のことを想起されたい）を打ち破る方向でのみ、近代化は推し進められてきたとも言えます。フランスでいえば、まさにフランス革命後の十九世紀以降が、その過程にあたることとなります。従来、ともすれば、民間に伝承されてきた習俗・慣習や生活のスタイル、人々の意識やものごとの捉え方は、近代化への抵抗要因、つまり遅れたものというレッテルを受けることのみ多かつたか、あるいはその裏返しで、逆にノスタルジীর対象であるかであったのではないのでしょうか。いま歴史学は、伝統的社会についても、まさに近代化が進められていく社会についても、伝統社会におけるかたから変容を蒙りながら伝承されてきた人々の日常性を問うことから、近代化の捉え直しにせまろうとしているかに思われます。さまざまな政治的事件、蜂起や革命といった非日常的

出来事も、また、そうした日常性との関係の中で新たな光があてられることになりました。

以上のことは、次のようにも言えます。つまり、近代化を推進してきたエリート層、その合理主義的価値観、文化、そして強力な国家、生産力の増強へむかおうとする国民経済などなどの、近代化のより一層の進展という変化を推進する諸力に対して、その推進の中で、ある時は切り捨てられ、また包摂されてしまい、ある時は従属化され周縁化された形での存続を余儀なくされた、そうした事柄に対するまなざしを取り戻すことを可能にすると。こうした観点からすると、定住者の世界にとっての日常性と、非定住者の世界との関連という問題も、重要性を帯びたものとなつてきます。すでに巷間話題となっている阿部謹也『中世を旅する人々』（平凡社）は、そうした移動する人々から中世社会を眺めて、一般に新しいイメージを与える好著といえるでしょう。しかし阿部氏の一連の仕事は、われわれの関心対象たる近代化との関係で考えると、そのまま近代へもつてくる、あるいはつなげてくるというわけにはいかないように思われます。なぜなら特にドイツが近代へ進むにあたっては、宗教改革の嵐と三十年戦争というカタスト

ロフとを通らねばならないからであります。フランスにおける民俗学ないし民族学の系統には、幾つかの筋が考えられるのですが、最近邦訳の出たヴァラニャック夫妻『ヨーロッパの庶民生活と伝承』（白水社、クセジユ文庫）は、その重要な一系統を示すものといえます。

ところで、こうした日常的な民俗への注視の中で近代化を再考することは、われわれ日本人にとってはまた、純粹にヨーロッパやフランス史の問題ではなく、明治以降ひたすらヨーロッパの近代化をモデルとしてきた日本の近代化を考え直すことでもあります。となると、われわれの頭に直ちに浮かんでくるのは、柳田国男の名であります。

彼の著作は読みものとしても面白いわけですが、もちろん面白いだけでは歴史分析に应用することはできません。その点、柳田民俗学を社会変動論として理論化しようとしている鶴見和子氏の仕事（たとえば『漂泊と定住と』筑摩書房）は、歴史研究者にとっても興味深いものがあります。フランス史の新しい動向の中で、民族学ないし人類学との学際的作業が少なからぬ位置を占めるとのべましたが、柳田民俗学の考え方、たとえば良く知られたハレとケとの関係、定住者と非定住者との関係とマツリの問題などは、フ

ランス史を考える者にとってもたいへん示唆的な理論、ヒントをもたらししてくれるものといえましょう。

日本でも近年、民俗学と歴史学の境域を越え出ようとする、あるいは民俗学的な目をもった歴史学、ないし歴史学的目をもった民俗学の作業が公刊されていることは、注目に値しましょう。私が思い浮かべているのは、宮田登『神の民俗誌』（岩波新書、高取正男『神道の成立』（平凡社）、文字通りの民俗学とは異なりますが、病に対する人々の対応という点で興味深い立川昭二『近世病草紙、江戸時代の病氣と医療』（平凡社）などあります。こうした作業と成果とが今後とも蓄積されることで、歴史学も民俗学も新たなふくらみを持ちうることになりましょう。近代か伝統かというような不毛な二者択一的設問ではなくして、新たな光の中で近代化の問題を考えようようになるのではないのでしょうか。

（東京大学・西洋史）



『重力と恩寵』

シモーヌ・ヴェーユ著

渡辺一民・渡辺義愛訳

春秋社

フランスの女流思想家シモーヌ・ヴェーユ（一九〇九—一九四三）のわれわれを捉えて離さぬ魅力はどこにあるのだろうか。それはまず、あくまで純粹さを追求する痛ましきまでに真摯な彼女の生き方にあるのだろうが、またその

中村弓子

思想の深く実践的な性格のうちにもあるのだと私は思う。実践的というのは単に、彼女が高等師範学校出のエリート中のエリートでありながら労働者の生活を実体験するためにルノー工場で働いたとか、スペイン動乱に際しては義勇軍に加わるためにいち早くスペインに出かけたとか、ドイツ軍がフランスを占領するとロンドンに渡って自由フランスのため協力したとかいうような彼女の生涯の軌跡を指すのではない。それにまた、彼女の思想がそのような体験のなまなましさを反映しているというだけの意味でもない。そうではなくて、彼女の思想が既成の思想体系や観念

や言葉（言葉というものが真にものを見て考えるためにいかに障害となることか。とくに言葉による構築物が時にとずらに支配する傾向のあるフランス的精神風土では）をご破算にして裸の現実を注視することによって生まれた思想であり、またそれに触れるものに単なる知的理解などは赦さない、賛成であれ反対であれ相手をじっとしてはいられなくさせるたちのものである、という意味で彼女の思想は実践的なのだ。（彼女の書物は読むものになにか爆弾を抱えているような感じさえ与える。遠くに投げ捨てて知らぬふりをするかそれともそれを抱えて彼女と共に殉死するか本当はそのどちらかしかないという感じを与えるのである。）

『重力と恩寵』という書物は彼女の短い生涯の晩年に当る一九四〇年からの二年間、パリ陥落と同時に逃れたマルセイユで、彼女の行き着いたキリスト教的思想を記したノートをまとめたものである。ここにその中の『人を読むこと』という一節を紹介しよう。この一節だけでも彼女の省察がいかになまの現実深く根ざしたものであり、またそれゆえにこそ力強く普遍的なものに上昇してゆくたちのものであるかがわかるのではないだろうか。今ここにその重

要な部分を原文から訳出してみる。

「われわれは人を読む。しかしわれわれも他人に読まれている。そしてたがいの読みとりは交錯する。自分が読みとっているようになれと相手に強制することは奴隷状態を惹き起し、他人に自分を、自分自身が読みとっているように読めと強制することは征服を意味する。そこにあるのは一種のメカニズムであるが、それはしばしばつんぼどうしの対話である。」

「正義とは目の前の相手のうちに自分が読みとるものと相手が別ものでありうることを認めること。というより、人がそこに読みとるものと相手は別ものであること、おそらくは全然別ものであることを読みとることである。ひとはみな別ものに読みとってほしいと沈黙のうちに叫んでいる。」

ひとはみな別ものに読みとってほしいと沈黙のうちに叫んでいる。それを読みとることこそが正義だとヴェーユは言うのである。私はこの一句を初めて読んだ時の胸が熱くなる思いを忘れられない。人間を正しく評価するとはどう

いうことか。左の秤に一定の重りをのせ右に対象をのせと
いった評価の「正しさ」はここでは崩れ去ってしまう。評
価は相手を創り出す行為と不可分のものとなる。ここに
あるのは愛の遠近法のうちに見た時に「評価」というもの
とする姿なのである。

さらに先を見よう。

「ある種の注意力がない限り、この読みとりは重力に従
ってしまふ。われわれは重力によって提示される意見（人
間や出来事に対してわれわれの下す判断に与える社会的順
応主義や情念）を読みとることになる。」

重力とはこの本の題『重力と恩寵』の重力であって、わ
れわれの中にあるすべての低きにつく傾向を指している。
キリスト教の文脈で言うなら原罪というべきところであ
うが、ヴェーユの「重力」という語にはそのような教義の
言葉にない内的な実感がある。人が生きるあらゆる場面で
それは抵抗しなければ人を低みへ倒す力として働いている
のである。

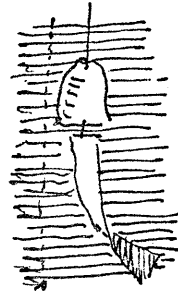
ある種の注意力が働かない限り、われわれの「読みとり」

は低みへ引く重力に従ってしまうとヴェーユは言う。この
注意力とはヴェーユが現実をつねに注視したあの注意力で
もある。それはまた各人が別ものに読みとってほしいと沈
黙のうちに訴えているその叫びまでも読みとる愛の注意
力でもある。

そしてこの節の最後にこのような「読みとり」の展望の
極まる場所としてヴェーユは聖書のキリストの有名な言
葉「裁くなかれ」をもってくる。そして「裁くなかれ」と
は、われわれが到達することのできない神の裁き、神によ
る「評価」のまねびである、というのである。

このようにしてヴェーユは、われわれの周囲の人間の
「読みとり」から神の裁き（それとも神の愛というべきか）
を垣間みるどころまで一息にわれわれをひっぱってゆく。
そしてこのようにヴェーユに引き上げられて自分の周囲を
見た時なんと他人が別の姿で見えてくることか。それで私
はヴェーユの本は深く実践的であると思うと言ったので
ある。

（お茶の水女子大学・フランス文学）



佐々木保行

京大乳幼児保育研究会編 「集団保育における乳
幼児の発達研究——寺田ひろ子遺稿ならびに
共同研究——」

さ・さ・ら書房 一九七九年 一三〇〇円

本書は心理学・保育学の分野で、基礎的研究を積み重ねていた寺田ひろ子氏の遺稿論文集である。寺田氏は三十一歳の若さで、短い生涯を終えたが、乳幼児の発達心理学・保育学の基礎資料の研究に、卒業論文以来、取り組み、鋭

い問題提起と研究着眼の新鮮さに、多方面から囑望されていた少壮気鋭な研究者であった。

ところで往々、諸論文の集積形態をとる書物は、読みずらく、断片的な興味しかそそらない場合が多い。しかし本書は、京大乳幼児保育研究会の研究者集団によって編集され、また各論文に解説が付されているため、寺田氏の問題意識や考察の軌跡が、明瞭に把握される。それ故、本書は読者をひきつけ、寺田氏と対話している状況へ誘い込む。

表題にあるように、本書は集団保育における発達の諸問題を、乳児期と幼児期前期（一歳〜三歳）の、三歳未満児

の研究に中心をおいて展開されている。この分野は、三歳以後の研究とくらべて格段に遅れ、研究の視点も稀薄な領域である。

寺田氏の発達研究の視点を、簡潔に要約するならば、乳幼児の発達をまるごととらえるということである。そのために、個人の系としてみた発達特徴と集団の系の中での発達特徴との相互関連性を重視し、乳幼児を活動の全過程の流れの中で、考察する必然性を指摘する。

発達の総合把握の研究の方向性を提起する寺田氏は、単に研究室の中からの提言だけでなく、否、保健所等のクリニックに携わる中で、仮説を検証し、たえず現場とのフィールドバックを行いつづけた。それだけに、彼女の指摘は、受けとめる側にとって重い響を与える。

「発達のとらえ方」の提言の一つとして、「相互関連性をもちながら発達している心性は少なくとも、身体発達の運動、手指の操作、認識の三つのレベルでとらえる必要がある」と強調する。

三歳以前の研究は、わが国の保育制度、行政などの立ち遅れと関連し、保育カリキュラム編成上の基礎資料の蓄積で、ことさら欠落している部分でもある。それ故、多様な

方法と多様な研究が駆使されつつある中で、本書は注目され、評価されねばならない、数少ない勝れた論文を含んでいる。

本書は、「乳幼児集団保育学入門」とも呼べる基礎文献に位置づけられる必読書である。

早川和男 「住宅貧乏物語」

岩波新書 一九七九年 三二〇円

私たちが家庭生活のあり方を考察する場合、欧米諸国に比し、住や居住環境の問題は、あまり重要な位置づけを付与されない。昨年、EC（欧州共同体委員会）は対日経済戦略基本文書の中で、「日本人はウサギ小屋に住む仕事中毒」と酷評したが、住宅貧乏の物的環境は、人格の形成・発達の問題と密接な関連をもつ。

「衣食足りて礼節を知る」「倉廩実ちて則ち礼節を知り、

衣食足りて則ち榮辱を知る”という、よく知られた格言がある。生活が豊かになると人は礼節を知り、道徳心が高まり、名誉を重んじ、恥辱にならぬようにつつしむといわれる。しかし、生活の豊かさを規定する内容に、住問題は欠落されている。

一般に住生活の悪化は、衣食の生活の悪化と比較し、その影響が直接的にあらわれにくく、人々の関心や行動の対象となりにくい。しかし住宅は、人間の意識や人格の形成に、はるかに大きな影響を与えつづける。

日本人は住宅のもつ重要性を、あまり理解しない傾向がある。それは住宅の貧しさが、直接的に影響をあらわしにくい、ということの他に、歴史的、文化的にも、「この世は仮の宿であり、起きて半畳、寝て一畳もあれば住まいはこと足りるといった仏教的諦観が、封建思想とともに生活全般を支配してきたことも事実」である。

著者も指摘するように、住宅政策を考える出発点としての認識は、住宅と人間の関係の解明を抜きにしては不可能である。本書はそれ故、住宅の貧しさが人間におよぼす影響を多面的に分析し、日本人の住生活の改善のため、多くの問題提起を行っている好著である。

大項目の目次は、I 過密居住の影響、II 弱い人々へのしわよせ、III 遠距離通勤と引越しの与える影響、IV 居住環境の悪化、V 家計を破壊する住居費、VI 住宅貧乏文化、から構成されている。

なかでも狭小過密住がおよぼす家族生活や子どもの生活への影響の大きさに、改めて驚かされる。子どもの健全な発達を願う教育・保育関係者にとってある面では教育・保育以前の問題ではあるが、過密居住の問題を考察することは、子どもの全体像を適切に把握する上で、必要不可欠な側面でもある。

ロンドン大学の森嶋通夫教授が、『イギリスと日本』（岩波新書）の中で、イギリスの中産階級の人々は衣食を切りつめても、十分な広さの家に住もうとすることを指摘している。それは、子どもたちに一人一部屋を与えることによって、独立心が培われるからだという。

個性豊かな人格と次の世代の性格を決定するといわれる住宅問題こそ、社会的・文化的・教育的な検討課題の一つである。

世良正利 「日本人のパーソナリティ」

紀伊国屋新書 一九六三年 四〇〇円

多くの日本人論・日本文化論がひしめく中で、本書もつユニークさは、文化とパーソナリティを研究する文化心理学の視点に立脚して、日本人の統一原理の解明に努めたことである。

国際交流が増々、隆盛になる今日、日本国民と同時に、国際人として行動できる人間を育成することは、教育や養育の重要な課題である。そのためにも、日本の文化・歴史の中で培われてきた日本人のパーソナリティを、よりよく理解する必要がある。その過程の中で、主体的行動を發揮できる人格を形成することは、とりもなおさず、日本人の精神構造の比較文化的観点からの分析と、歴史・社会的視点からの解明の上に、日本人像の展望が生まれるのである。

ところで世良氏は、日本人のパーソナリティの統一原理へ迫るために、二つの基本的概念を使用する。一つは自己否定性行動であり、他は自己肯定性行動である。前者の概念

は、日本人の伝統心理の基本的性格をなすもので、例えばコミュニケーションの場において、「話さなくてもわかる」とばかり、己を抑制し、しりぞけようとする傾向である。

伝統心理としての自己否定性は、人間対人間の関係に行する神対人間の関係での行動原則の残照、という仮説を提起する。この原則の典型例を、「まつり」に求め、祭事を研究することで、日本人の伝統心理の歴史・社会的性格を解明する。

この自己否定性行動は、無常性行動と無心性行動の二つの側面をもつ、と世良氏はいう。無常性とは、ある目的をなしとげるべく行動するとき、困難や障害にあうと、自己を否定し、他の行動者にバトンを託して行動の継続をはかろうとする傾向をいう。高名な謡曲の怨霊物である「道成寺」は、典型的な無常性行動を示したものである。

他方、無心性行動の典型は、地芝居・村芝居にみられる如く、演技者としての人形は、みずから行動の主人公たることを決して求めず、動かされるままに動くだけである。それ故、人形は自己を動かすものに運命をゆだねた無心性の具現者である。「祭礼における村芝居の奉納は、人間がその理想とする無心性の行動準則を、演技者や人形の行動

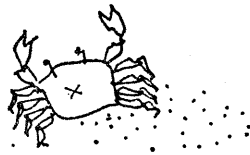
例に託して神に誓う意味をもっていた」と世良氏は考える。

では自己肯定性行動とは何か。自己が自己の行動において、主人公となり得る場合を指す。ここでは自己の目的や願望を、神や他者に託すことなく、全行動過程を自己の努力で成就することである。

今日の、若い日本人に、自己肯定性行動が急速に育ちつつあるが、厳密に言うると、日本型自己肯定性行動と呼ぶべきものである。例えば「急ぐという習性」「ものの順序を踏まない傾向」にみられるような側面である。

欧米人にみられる自己肯定性行動の準則が真に形成されたとき、日本人の国際性が改めて評価されるであろう。本書は、日本人の主体性の確立とは何かを考察する上で、貴重な視点を提供した、勝れた文化心理学的日本人論である。

(宇都宮大学・心理学)





亀井理

夜空を見上げて、空にはこんなにも星があったのかとあらためて驚くのは、都会を離れる機会の多い夏の経験のひとつであろう。星をめぐって古人の織りなした物語も興味のつきない話柄であるが、いまここで取りあげるのはその話ではない。これから紹介する本は、夜空に満ちているけれども眼には見えない光、つまり普通の光よりも波長の長い光から話が始まる。残念ながら、人間はそれを感じとることができないけれども、もしも普通の光より十万倍くらい

も波長の大きい光（マイクロ波）を肌で感じられる人があるとするれば、その人は宇宙が創造された灼熱の瞬間の

「名残りのぬくもり」を感じることができるといえるのである。

この大宇宙のはじまりはどのようなものであったのかという問いは、いうまでもなく、人間の歴史と同じくらいに古い。答のほうも、人間の数と同じくらいとはいわないまでも、とにかく枚挙にいとまのないほどであった。いいかえると、いずれも信ずるに足りなかつたわけである。物理学が何らかの答を用意できるようになったのは五十年前、かなりの確実性をもって答えられるようになったのが五年前で、この本の書かれたのは三年前だった。

この本とはS・ワインバーグ著・小尾信弥訳「宇宙創成はじめの三分間」(ダイヤモンド社、昭和五二年)である。ワインバーグは昨年つまり一九七九年度のノーベル物理学賞受賞者。賞の対象は素粒子論の分野の仕事であるが、宇宙物理についても論文はもちろん大部の専門書まで書いている。つまり、こういう本を書くのに最もふさわしい人といえるであろう。

宇宙の創成を考えるうえで基本的な事実は上記のように二つある。半世紀前というのはハッブルの法則の発見である。これは遠い星(銀河)ほど大きい速度で地球から遠ざかってゆく、つまり宇宙は膨脹しつつあることを確かめた。宇宙が閉じているか開いているのかまだはっきりしないが、閉じているとすれば、ちょうどふくらんでゆく風船のようなものだというのが、この法則の主張するところにはかならない。風船の上の二点の距離が大きいほど、たしかに、遠ざかる速度は大きくなる。

風船がふくらみ始めたときの様子をいまに伝えてくれるのが「名残りのぬくもり」である。これは決定的な大発見だった。この本ではきわめて難しげに命名され、宇宙マイクロ波輻射背景とよばれているが、これが偶然に発見され

たのが十五年前、十分に調べあげられてその存在は間違いないといえるようになったのが五年前ということになる。その理論的解釈——出来たばかりの宇宙はものすごい高温で光に満ちみちていた。膨脹とともに温度は下がり、とり残された光は波長がのび、マイクロ波となっていまなお宇宙空間をさまよっているのだ。

こういう具合に書いてゆくと、百億年以上も昔のことを見てきたようにいうけれども、いったいそんな話は本当なのですかという読者の声がかえりうるような気がする。まず、こういう話にどのくらいリアリティが感じられるかは、実際にこの本を読んでいただくほかはないと答えよう。光だけでなく、質量をもつ物質の形成に関する理論的検討と観測データをつきあわせて、宇宙像を組立てゆく過程をここでは紹介しきれないからであり、また、この本は「ある程度こみ入った議論で頭を使うことは好きだが、数学や物理を専門としているのではない人を想定して」書かれているからである。

さらに、ニュートン老の答も援用しておこう。物理法則は、新しい事実により修正されるとかくつがえされることがないかぎり、例外なく妥当すると考えなさいと彼はい

う。この地球上で、わずか（！）三百年の間に蓄積された物理法則に関する知識を、そのまま、宇宙の創成を論ずるのに使うのは、ニュートン老の勧告はいまだかつて物理学者を裏切ったことはなかったからである。

さらにもうひとつ、著者のしめくりの言葉も、こういう想像力あふれる物語の弁明となろう。「人間は神々と巨人たちの物語で自らを慰めることや、自分たちの考えを日常の生活のなかに閉じこめることでは満足しない——人間は望遠鏡や人工衛星や加速器をつくり、自分たちが集めたデータの意味を解こうとしていつまでも机の前にすわりこんでいる。宇宙を理解しようとする努力は、人間の生活を道化芝居の水準からほんの少し引き上げ、それに悲劇の優雅さをわずかに添える非常に数少ないことのひとつである。」

もっとも、これらすべての物語はいわば物理の輝やかしい半身について語る。光にともなう影についてもひとことふれなくては片手落というべきだろう。第二次世界大戦とともに、物理は国家権力と直接に結びつき、それ以来、つねに暗い影を背負うことになったからである。そのまえばれともいえるのが、一九三三年のヒトラーによる政権掌握

だった。一九二〇年代には世界の物理の中心地と自他ともに認めていたドイツの物理学界はほんの数年の間に壊滅状態になってしまふ。

物理にとって政治の時代の開幕をつけるこの時期を、詳しくしらべあげた本がバイエルン著・常石敬一訳「ヒトラー政権下の科学者たち」（岩波書店、昭和五五年）である。この本の二人の主人公レーナルトとシュタルクというノーベル賞学者にとって（二人とも実験物理学者だったが）、理論物理は形式的ユダヤ的思考のあらわれとして排除すべき対象とされた。フリーア人種の優秀性に固執する彼らの考え方は、いまからみれば戯画にすぎないが、この本を読んでいると、物理学者の想像力の飛翔に政治のおもりがついたので、まさにこの時期であったことが痛感される。二冊をあわせると、ちょうど物理の光と影ということになるだろう。

（お茶の水女子大学・物理学）



歴史ブームだという。テレビで時代物の連続ドラマが毎晩のように放映され、歴史を売り物にした月刊誌が何冊も出版され、歴史小説がいつもベストセラーの上位を占めている現状からすれば、たしかにその通りであろう。

歴史小説や歴史挿話のたぐいが、何故われわれの興味を惹くのかを考えてみると、そこにはいろいろな要素が考えられるが、一つには先祖探しに見られるような時代考証を含めた推理小説的魅力にあり、二つには現代社会の風俗習慣、約束事と異なった条件をもつ時代的制約の下で生きていく人たちがもたらす様々な葛藤の面白さにあるのではないかと思う。もちろんベストセラーたりうるには、これらの要素の上に、作者の構想力や描写力が必要なことは言うまでもない。

大口勇次郎

そのような作品にめぐりあい、小説としての楽しさを満喫したときでも、歴史をやっている立場からすると、ふともの足りなさを覚えることがある。それは、その作品が歴史上の人物や時代を扱っていても、実はそれらが借景であり、味を添えた風俗にしかなすぎないことがあるからである。あるいは「時代的制約」を描いていても、常識的範囲におわっていることが往々にしてあるのである。卑近な例でいえば、捕物帳が刑事物のやき直しであったり、大名の御家騒動が企業小説と同じ論理で展開しているような場合である。しかし、あまりこの点を小説の世界に求めるのは、ないものねだりなのかも知れない。

「事実は小説より奇なり」という言葉があるように、歴史的事実を丹念に積み重ね、そこに一つの論理を把握する

ことよって、フィクションでは到底思ひの至らないものを明らかにすることがあるのである。そのようなノンフィクションとして、ここでは二冊の江戸時代を対象とした書物を紹介したいと思う。

一冊目は、『赤穂四十六士論——幕藩制の精神構造——』

(田原嗣郎著、吉川弘文館、一九七八) という本である。

この本の主題である赤穂事件は、すでに江戸時代から「忠臣蔵」という形で脚色され歌舞伎芝居の評判をとっており、今日でも大佛次郎の「赤穂浪士」をはじめ、現代的味付けをして小説・映画・テレビにくり返し登場している。

また主君の仇討ちが何故日本人にもてるのか、という視点から日本人論の絶好の話題ともなっているものである。

著者は、赤穂浪士たちを討入りにまでかりたてた要因を、彼らの書きのこしたの中から再構成していくのだが、それによると、実は参加したもののたちの立場も一様ではなく、浅野家の御家再興を第一義に考える藩家老大石良雄の立場と、亡君の御恩に報ずることのみを考えるいわゆる急進派の下級武士(たとえば堀部安兵衛)の立場は、そのよってたつ基盤からして異なるものであることがあきらかにされる。

また討ち入り後に、彼らの行動の正否をめぐって、儒学者たちが一大論争を展開するのだが、著者はその議論のヒダをたどりながら、武士の間に二つの相異なる倫理規範が存在したことを明らかにする。一つは、主君の怨みを晴らした赤穂浪士の行動は、武士の鑑で義士に値するという考えで、家臣の藩主にたいする忠誠を絶対とする考え方である。他は、たとえ主人の仇討ちでも幕府の処置に対する批判行動は許されないとする幕府重視の考えである。この二つはともに幕藩体制といわれる当時の存立基盤そのものに基礎をおく考えで、平常では両者は車の両輪となって円滑に進んでいるが、赤穂事件ではこの両者の矛盾が表面化したものであった。

このように、著者によれば、当時の武士をとりまく精神構造は、その社会体制や文化的伝統の中で、重層的に構成されていることが明らかにされ、従って赤穂四十六士の行動もまた、主君の仇討ちという単色なものでなく、複合的かつ個性的な彩りをもって、われわれにせまってくるのである。著者は、この本を「学術書として書いた」とその「まえがき」で記しているが、同時に引用原文を現代語に書きかえるなど周的な用意もしており、少し腰をすえれば、歴

史小説を好んで読む人なら、きつと惹きこまれざるをえない、緻密な論理と内容をもった書物である。

つぎに紹介したい本は、『にっぽん音吉漂流記』（春名徹著、晶文社、一九七九）である。前の本の著者は専門の思想家であったが、この本の著者は史学出身の出版人である。著者は、歴史の片隅にかすかに名前をおとした一人の漂流船員音吉を取上げて、その足跡をたどり、漂流の記録はもちろん各種の資料をひもどき、故郷の村を訪ねたり、救助したアメリカ人をさがして米・英の図書館まで追跡するという、ジャーナリストとしての行動力をもったルーツ探しは、まさに歴史考証学の方法でもある。

鎖国時代の日本において、漁船や貨物船が風雨にあって難船し漂流したのち、外国人に救助されさまざまな曲折を経て帰国するという漂流譚は、江戸時代以来かなりの数が書きのこされている。このことを主題にした小説もいくつかあって、たとえば井上靖の「おろしや酔夢譚」は、伊勢の大黒屋光太夫の一行が漂流し露国に救助され、のちに送還されるまでの十一年間の教養な体験と望郷の念をもつばら光太夫の口述記録にもとづいて形象化した作品である。

これとくらべると音吉は、漂流記を口述していないし、そもそも日本へ帰りつくことも出来なかった人物である。光太夫がレザノフとともに帰国して歴史の脚光をあびたとすれば、音吉は、異国船打払令によって祖国の砲弾をあび、国際情勢と幕府の政策との不幸な谷間にあって帰国を断念することを余儀なくされたのであった。

この本は、音吉についての断片的な情報と史料を丹念につなぎ合わせて、開国前後のあわただしい国際関係の中に生きた一人の日本人の生涯を浮かび上らせているが、著者はその終章を「単に望郷の想いではなく」と題して、故郷を捨てかつ日本を想っている音吉をえがいてみせる。評伝を書きながら、鎖国とは庶民にとって何であったかを考えさせてくれる書物である。

この二冊の本は、それぞれ仇討ち、漂流という、どちらも教科書風の概説書では重要とされず、一つのエピソードにしかならない主題をとりあげて、歴史の面白さを十分に味わわせてくれるとともに、そこに鋭いメスを加えることによって、江戸時代社会の本質に触れる部分を探りあてているのである。



館 かおる

『娘巡礼記』

(高群逸枝著・堀場清子校訂 朝日新聞社)

一九七九年

近年の女性史ブームでとみにその名を目にすることが多くなったが、高群逸枝の名を知る人は、まださほど多くはないであろう。

高群逸枝は、明治二十七年火の国熊本に生まれた。後半生を前人未到の女性史研究に打ち込み、『母系制の研究』、『招婿婚の研究』の二大名著をはじめとする業績を後世の人々に残した。日本古代の婚姻形態を実証的に明らかにし、日本固有の醇風美俗であるとされてきた家父長的家族制度が、永久不変のものではなかったことを歴史的に跡づけたのである。三十年間門外不出、ひたすら刻苦勉勵の毎

日であった後半生の活動に比して、その前半生は、波乱に満ちたものであった。

逸枝は、長篇詩『日月の上に』、『放浪者の詩』を携えて詩人として世に出る。

汝洪水の上に座す

神エホバ

吾日月の上に座す

詩人逸枝

大胆で奔放で魅惑的なこの詩集は、詩人高群逸枝の評価を二分するに充分であった。一方で次第に社会問題・婦人問題へと開眼していった逸枝は、アナキズムの立場に立った評論家として、華々しい活動を繰り広げる。昭和三十九年に没するまでの七十年の生涯の、外面的には対照的にみえるこの前半生も後半生も、逸枝の内面に即してみるならば、貫ぬかれた一つの思想の軌跡に他ならなかった。

ここに紹介する『娘巡礼記』は、今から六十二年前に『九州日日新聞』に百五回にわたって連載され、関係者の誰もが予想しなかった程の反響を呼んだ、高群逸枝の処女執筆である。逸枝自身も生前再び見ることもなかった幻の処女作であった。

高群逸枝は、大正七年故郷熊本の専念寺をふり出しに、四国八十八カ所をめぐる約半年間の巡礼の旅に出た。時に満二十四歳の逸枝は、生涯の夫となった橋本憲三との愛に苦しみ、教職を辞して、窮乏と貧困の中にいた。この混迷状態から脱出し、一切の制約から放たれ自由ならんことを願って、逸枝は自己のすべてをこの巡礼行に託したのである。

往時の四国巡礼は、弘法大師信仰に結びつき、大師の聖地を巡るものであったが、業病にかかったり、失敗して家郷にいられなくなった悲運の人々の、おのれ自身を捨ててに行く場所でもあった。逸枝の巡礼行は、自らをそうした位置に放下することにより、人間存在の根源を凝視しようとする求道の旅であった。

六月四日、逸枝は菅笠をかぶり、金剛杖をついて、白装束の巡礼姿で専念寺を旅立つ。固い決意とはうらはらに、

人々の声が聞こえると羞かしさで真赤になり、ハンケチを顔にあてたまま逃げる様に通り返る。志のお米を受けたものの、重くてぶらさげることができず、投げ出して一散に逃げて来てしまふ。大分では、逸枝を観音の化身と観じた篤信の伊東官治翁が、逸枝守護のため凶らずも同行することになった。

七月十四日にはいよいよ四国の八幡浜に上陸する。一番から八十八番までのお寺の、番数の多い方へと辿るのが「順打ち」、その反対が「逆打ち」だが、二人は登り道の険しい「逆打ち」をとって南下する。

逸枝は歩きながら想う。吾々が理想とすべき最高人格へ到達するには、第一に解放せられることである。あくどい装飾だの、污垢だのをスッポリ脱いで、本然の生地に戻る事である。第二に愛することである。本然の生地の上に温かい美しい聖らかな輝きを添えることである。逸枝は、「一切愛」、「普遍愛」へと自己を昇華させようとする。しかしながら、現実には、「死の勝利に出てゐる乞食の群」を思わせる遍路衆と宿をともし、業病に病む少女と心を通わせようとする時、彼女の希求はたえまない試練をうける。だが、底辺にある者、不幸な者、虐げられた者と共に生きよ

うとする逸枝の想いは、次第に虚飾を捨てた聖愛へと高まりをみせていく。

七月二日、二人は入野の海岸で野宿をする。海鳴りのする太平洋にむかって逸枝は光明真言を千回唱え、「わが心よ静なれ、安らかなれ。ありの儘の其まゝなれ」とほのぼのした喜びにひたる。

巡礼記には、逸枝の内面の苦悶ばかりではなく、「しらたま乙女」ぶりが随所に發揮されていてほほえましい。土佐湾の波静かな海を望んで、逸枝は地球の自転論を宮地翁に説法する。翁は、地球が廻るなら水桶の水はなぜひっくり返らぬかとなかなか納得しない。逸枝はむきになって唇をふるわせ、涙をながしながら懸命に説く。とうとう翁はもう降参しますと言いつつも、逸枝は、お爺さんは決して解っちゃいないのに平気で笑っている、なんとも憎らしい、残念だと本気で憤っている。

そしてきらめく才気。自己解放への階段を登り、自由の境地を得つつあった逸枝は、後年人々を魅了した詩人としての才気を垣間みせる。また遍路狩りにあつては、民衆の信仰心と国家権力として立ち現われた警察との埋めようのない谷間に鋭い批判の眼をむけ、当時の風俗や社会の底辺

を見事に写し出している。

逸枝たちは七月二十三日に土佐に入り、阿波をぬけて九月二十八日に瀬戸内海に出る。あこがれの瀬戸内海を見て、逸枝は一種の解脱状態と言える不思議な落ち着きを得るに到る。十月十八日には、四十四番菅生山大寶寺に詣で、本願成就となった。逸枝はこうして得た、静かな、真摯な、度ましい聖い感情と操持を、どんなことがあっても無くすまいと天に誓言する。十一月二十日にはようやく一人で熊本の専念寺に帰り着き、翌日の夕暮故郷の生家の前にたたずむ。

帰り来て先づ嬉しさに悲しさに入りもかねしか此所ぞ我が家

読者は、思想家高群逸枝の自己形成の原点がこの巡礼行にあることを知り、そしてこの『娘巡礼記』は、高群逸枝にとつての旅立ちの書に他ならないことを知るであろう。

本書の後訂者堀場清子氏に唱和して、私もまた祈らう。「あらたな読者の魂をたずねて、八十八カ所をめぐる巡礼娘の旅よ、ささくあれ」と。なお、高群逸枝の自伝『火の国の女の日記』上・下(講談社文庫)もあわせて読まれることをおすすめする。(お茶の水女子大学・女性文化資料館)

わたくしの

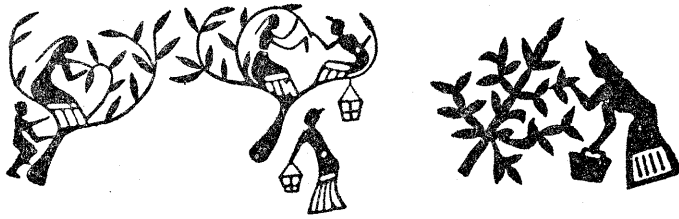
シルクロード ③

横 張 和 子

パルミュラの絹織物

前々回、わたくしは絹の道を西方に向けて送られた中国絹を求めて、シリアのダマスクスの国立博物館にまで出かけて行ったことをお話ししました。その一九七四年の春、ダマスクスに長く滞在している民間の日本人は二十人にも達していなかったのですから、まだシリアはなじみの少ない国であるかもしれませんが、今、日本でもはやされているシルクロードの西の一端がここを通っていました。一九二〇年から三〇年代にかけて、シリアでは二つの大きな遺跡が発掘されました。その一つがパルミュラの大遺跡であり、その大商人の一族の墓から、それまで古文獻では知られていても、実際には認めることの出来なかつた中国遠来の絹が発見されたのでした。

ローマ時代、軽く柔く、しかも美しい光沢をもつ東方の絹は、西方の人々からセレスと呼ばれ、それを作り出す国はセリカと呼ばれていました。この麗しい糸や織物を作るセレスはアウグストゥス帝の時代（前三〇～後一四）の文人や詩人たちが好んで題材とするところでした。詩人ヴェルギリウス（前七〇～一九）は「セレスは繊細な羊毛を森の木の葉から梳き出す」とうたい、プリニ



戦国銅器にみえる桑とりの図

ウス(二三一七九)は「羊毛のよう
な、彼らの森の産物」といい、また
詩人のシリウス・イタリクス(二五
一〇二)は「今や、太陽は、昨夜
西海に放ちし馬の群を駆りて、東邦
の岸に至たり、新しき曙光にまづ目
ざめしセレスの人は、ふたたび和毛^{ワモ}
生る林より生糸を紡ぎはじめぬ」と
詠んでいます(以上、護雅夫「古代
における東西文物の交流」平凡社
『東西文明の交流 漢とローマ』よ
り)。西方の人々にとって中国の絹
は昆虫から得るもののようにだが、そ
れは羊毛のようなものであると考え
それが家蚕の飼育で計画的に得てい
たものであることはまだ知っていな
かったのです。中国で蚕^{カイコ}を飼って
絹をとることは、中国の帝(前二六
五〇ごろ)がその妃西陵に行かせた
のがはじまりであるとされています。

す。殷代(前一六〇〇―一〇二八ごろ)には確実に絹織物は存在
していますし、戦国時代には養蚕や機械は女の重要な仕事となっ
ており、量産も可能としていました。

ところで地中海地方でも古く絹に似た繊維で作られた薄い織物
が知られていました。有名な「コス布」です。この織物はまるで
ガラスそのもののように、ローマ皇帝ヴェスパシヤヌス(在位六
九―七九)に重用された、さきの大ブリニッスはこれを「婦人を
裸にする薄衣」といい、これが、とくに、夏の衣服として紅燈の
巷から上流社会にもひろまって、婦人ばかりか男子もまたこれを
好んで着用したことを憤慨しています。この繊維について、アリ
ストテレス(前三八五あるいは三八四―三二二)は「ある大きな
幼虫―角のようなものをもっている―が、つきつき変態して、ま
ず青虫の類、ついで *bombylius* やうに *neotalus* になる。この
幼虫は六ヶ月でこのような変態をとげてしまう。この生きものか
ら婦人たちは *bombycina* をひき出して、練りとり、そして、そ
れを織る」といい、この繊維ではじめて織物を作ったのがコス島
の女 *Pamphie* であったと述べているのです。ここに用いられて
いる術語がすべてギリシア語なので、これが中国の養蚕を伝えた
ものでないことは確かです。これは山繭の一種で、オークの木や
糸杉の木に棲息し、トネリコの樹上で繭を作る *Lastocampa* *Orus*

だとされています。その繭の大きさは八センチから九センチにもなるようですが、厚さは薄く、採れる量も少く、やがて中国から流入する生糸や絹布にとって代えられていったと考えられます。

中国から西方の国に絹が運ばれていったことは東西の古文獻が記し、関連記事は少くないのですが、その一つ、南海の貿易を記した「エリュトウーラ海案内記 *Periplus Maris Erythraei*」にも書かれています。この案内記の年代決定は諸説ありますが、紀元四〇―七〇年のころとするのが大勢の説です。これによると、中国の生糸が西インドの港、カンジス河の河口にあるバルバリコムで、船に荷積みされ、季節風によって、メソポタミアの方に出航することが（三九節）、またもう一つの港、ハリユガザに、内陸の大きな都 *Tana*（支那か）からセーレスの羊毛（真綿）と糸と織物が北方のバクトリアから運ばれてきていることが分ります（六四節）。

さて、本題に入らねばなりません。ここパルミユラの塔形の墓から出土した絹資料はフランス人 R・フィステル氏によって整理され、詳しく検討されました。氏によれば、パルミユラ出土の絹の中にはコス産の山繭の種類の繊維は見当らず、いずれもが中国の絹糸であることが述べられています。

パルミユラの絹資料はほかの織物、亜麻布や毛織物と同様、ど

れも小断片化して、原の形を知る由もありません。この地の埋葬法は死者のための特別な屍衣というものはなく、遺骸を包んでいたのは、生前に着ていたものの使い古しでした。亜麻布や毛織物では、断片化してしまっても、壁画や彫刻の例から原の形を知る手がかりを得ることができますが、絹衣の場合はどのような形に仕立てられていたか、うかがい知る他の資料がありません。ここでは断片化したそれらから、むしろその時代の、それは凡そ中国の後漢の時代（二五―二二一）に相当しますが、中国絹の特色や性格を知るといふ利点をとり上げるべきでしょう。それに中国絹の西漸の実態も把えられることでしょう。

断片類を整理した結果は①無地の平絹、②刺繍、③平地綾、④経錦、⑤絹と亜麻の交織布、⑥近東産の平絹、⑦絹の綾織、⑧中国の絹に刺したシリアの刺繍です。①から④までは中国産とみなされ、⑤は中国とローマの中間の特色を示して、西域のオアシスの産と考えられるもの、⑥から⑧は確実に西方産とされるものです。もちろん割合は中国産が圧倒的です。これらを一つずつみていきましょう。シルクロードの名は人口に膾炙していますが中国から実際にどんな種類のものが送り込まれていたのか、文献で知り得るのは、真綿とか糸とか織物とか、漠然としたものです。パルミユラの絹は、失われてしまったものは夥しいものであったに

違いありませんが、しかしそれを具体的に示す唯一の資料なので、紙面の都合で二回ほどにわたることをご了承下さい。

①平絹 砂ぼこりや砂礫にまみれ、あるいはミイラを包む亜麻布の殻にはりついていたボロ同様の絹の断片を、すぐさま産地別



漢画像石にみえる機織の図

に分類することは、東西の織物の特質がまだよく知られていなかった時、非常に困難な作業であったと思います。調査者フィステル氏もそれを述懐していますが、その大きな労苦の末に整理された一群の絹がもたらす諸々の事項から、逆に中国絹の特質が帰納されてきます。平絹の部に集められたものは、0.1 ~ 0.2 ミリの太さの家蚕糸 Bombyx-mori で、経糸と緯糸とが一對一に交錯する平織です。ここに集められたものは、どれも、経糸の方が緯糸の数を上廻っています。経糸の一センチ間の密度は四〇本代から一〇〇本、一二〇本にもなっていて、経緯の割合は緯糸の一・五倍から二倍、三倍となっています。そのため、緯糸は経糸におおわれてみえないというものが多いのです。その場合、経糸はやや長くのびて、緯糸と交錯しますから、布の面には経糸の横畝があらわれます。織幅は五十センチ前後で、このような絹布を織ったであろう織機が漢代の画像石の浮彫にみえています。こうした無地の絹は繭から直接繰りとった生糸で織り出され、織り上ってからアルカリの液の中に浸され、生糸をとり囲んでいたセリシンをとり除いて、絹特有の美しい光沢を出します。そして染色されます。西方へは生織のまま送り出されていたようです。

②刺繡 パルミユラの刺繡では二種の手法が識別されます。つ



パルミューラ記念門

まり、これは⑧の刺繍に対照されますが、一見してその相違は明らかです。この種の手法は一九二四年から二五年にかけて行われた北蒙古ノイン・ウラの匈奴の墓から出土した中国刺繍や、また近年中国の考古学者が行った（一九七二）湖南省長沙市馬王堆の

前漢墓から出土した凄絶なまでの細密な刺繍にみえ、中国産と断定するのはもはや難しくありません。パルミューラの中国刺繍は優良な横畝地合の平絹に、濃淡の青、赤、茶などの色糸を用い、鳥のような図を刺しているようですが、断片で、全くその全容を知ることとは出来ません。しかしノイン・ウラの中国刺繍から連想して、これと同じような雄偉な有翼の竜を同様の技法、鎖繡で刺しているものようです。中国の本土においても刺繡絹は最も高価なものであったことですから、パルミューラで求められた時には、想像を超えた高値であったことでしょう。ローマ皇帝ですら、容易に絹の衣をまとうことが出来なかつたときです。富裕ではあつたかもしれませんが、一國の支配者たるものでない商人が、このような豪華な絹をまとうことが出来たのも、パルミューラが東西交易の幹線に沿い、オリエントきつての有力なキャラバンの都であつたからです。ここで、わたくし共になじみ薄い隊商都市について述べてみます。

隊商都市というのは、砂漠を走っている交通路上のオアシスに発生した宿駅が、交通量の増加に伴って拡大し、「都市」にまで発展したものです。隊商都市は砂漠を行く隊商に水を補給するところが不可欠の要件であります。そのほか都市であるために、神殿、隊商宿、市場、劇場、記念門などの設備をそなえていなければ



▲ 綾地綾文綾



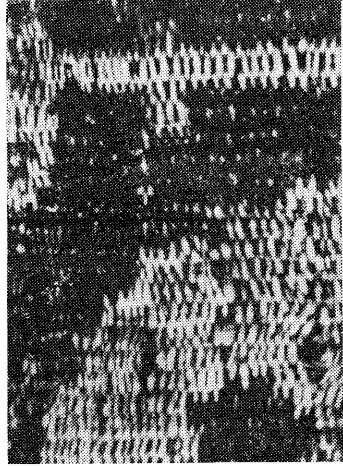
▲ 平地綾文綾

(共に正倉院蔵 8世紀)

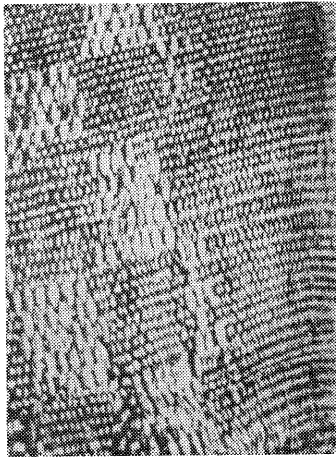
ばなりません。このような隊商の都市では、その政治の担手は定期的な市場や交易を行う商人たちでありました。そしてその主要な財源はその地を通る隊商に課す関税によっていました。ですから一たび交通路が変り、物産の交流が杜絶すると、砂漠の中で、空中楼阁のように繁栄していた都市は、一朝にして死の町と化してしまふのでした。

③平地綾 経糸の密度六六本、緯糸三八越というような横畝地合の平織の地に、地の緯糸を三越浮いて一越に沈む長い経の浮糸で模様を織り出しているものです。このように地と文の組織を異にして作る紋織物をわが国では綾と呼んでいます。綾には地を平織にしたものと、綾織にしたものと二種あります。しかし中国の文献では地を平織したものを「綺」、地を綾織したものを唐代の「綾」としているようです。ですからわが国の上代の綾について「綾」としては、綾地の綾を「綾」というべきかと考えますが、長い間どちらも綾と呼ばれて来ているので、わたくしはこれを区別して平地綾、綾地綾の名称を使用することにしています。

この二つはどちらも単彩の紋織物で似たようなものですが、それが生まれ、存在した沿革の歴史は大変違ってきます。平地綾は股代のむかし(前一六〇〇)から存在しますが、綾地綾は唐代



▲ 漢錦の組織
2～3世紀

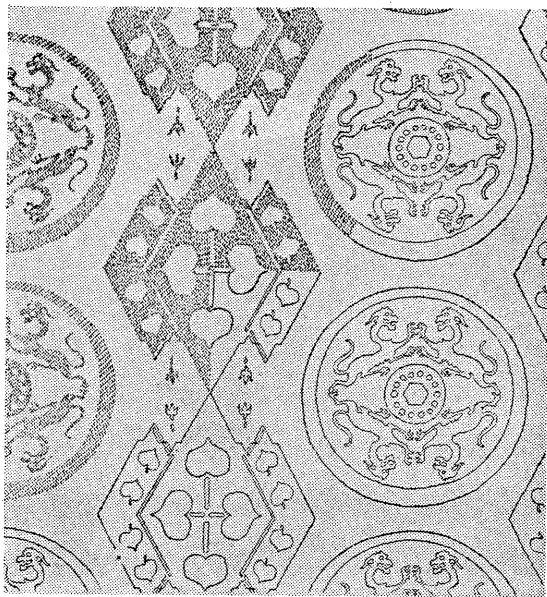


▲ パルミュラの平地綾
の組織

(六一八―九〇七) になってから生まれてきたものです。綾地綾は平地綾の技術の発展上にあられたという見方が行われてきました。それは誤りで、綾地綾はよそからの影響、つまり西方から

の綾織(斜文組織)の波及によって生まれてきたのです。唐朝の西方文物歓迎の風潮の中にペルシア風の三枚綾緯錦に呼応して作られたのです。綾織というのは、今日、毛織物の洋服地によくみかけるサージ織のことです。この織り方は古代中国の絹織物の中にはなかったのです。このことは研究者の間でも余り明確に認識されていません。しかし、わたくしがパルミュラの絹織物の断片資料の中で、ちょうど⑦になる絹の綾織をみて深く印象づけられたのが、平織と綾織の生い立ちの相違でした。このことについてはまた⑦絹の綾織の項で述べるとして、問題の平地綾について、これが頗る平織的な織物であることを述べなければなりません。

普通、綾は、その文様の組織では緯糸を三越浮いた長い経の浮糸がとなりのそれと接して連続して斜行して、一見綾組織風になっています。この点から、この種の紋織物がわが国では綾と呼ばれる所以なのですが、織技上これは本物の斜文組織ではないのです。ですから平地綾は、斜文組織すなわち綾組織とは無関係なのです。パルミュラの平地綾ではこの点が一層顕著で、文様を作る浮経は、ここでは斜行せず、相隣りする浮経の間に平組織が織り込まれていて、①の平絹でみたような横畝地様の組織を作っています。それはまた漢代の経錦の組織にも似ていて、漢錦に相呼応させたようなところがみえます。しかしこの平地の特色は、この



パルミュラの平地綾の模様

技法によれば、本来の平地綾の製作工程を半減することが出来るということなのです。これによって平地綾の装飾は効果は少しも変らないばかりか、一層明確に文様を平地に映し出す効果すらもたらしています。つまり、これは中国の学者夏鼐氏が云っているように、中国の綾としては独自の、西方向け輸出品として、特に計画された中国絹の目玉商品であったのではないかと考えられます。

す。これは漢中では用いられなかったようです。何故ならば、中国における発掘品にはなく、またわが上代綾にも見つけ出すことができません。この平地綾の意匠は前漢来の伝統をよくあらわして、中国特産の絹の面目を押し出していますが、しかし平明、軽快な趣向に整え、西方人の好みをもよく意識していることが分ります。中国人の絹の道にかけた商魂のようなものすら感じます。

ところで、このような中国の絹は、勿論、衣料として用いられたではありません。しかし、多くの場合、それは解体されてしまったのです。ほぐして、もう一度糸にされ、そして緩やかな織りの、透けてみえるような薄い布に再び織り直されたようです。先のプリニウスはいつています。「セレスはわが国の婦人にまずそれをほぐし糸にし、それを織り直す二重の仕事を課す」(博物誌六卷二十節)と、またローマの詩人ルカヌス(三九―六五)はその叙事詩『内戦』に、「クレオパトラの白い胸はシドン(地中海沿岸の都市)製の織物の下に透けて見えたが、その織物はセレスのおさで織られて目がつんでいたのを、エジプト人の裁縫師がほぐして糸に撚りかけ、織り直したものであった」(一〇巻一四一―一四三)と記していますから。

(山脇女子短期大学)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究（三十六）——

津 守 真

このシリーズで、私は、大学の附属幼稚園の三歳児から五歳児

までの三年間、ひとつのクラスで同じ子どもたちとつきあうこと

ができた、その体験を中心に、子どもの世界と保育について考察してきた。今回記すのは、そのクラスに私が行った最後の日のこと

とであり、卒園式前の普通の保育としてもほとんど最終の日と云ってよいと思う。子ども自身には、最終の日という意識はほと

んどないだろうが、いろいろのところ、この三年間の幼稚園の生活を完結させるような姿を私に見せてくれている。私のまわりで起ったこの日の子どもの姿を、一日の流れの順序に従って考察

する。

五歳児三学期 最終の日——三月十四日

N——親しさの交流のスポット

朝、登園してきた子どもがまだ少ないころ庭に出ると、男児Nが遠くから走ってきて、私にとびつく。私はNを抱き上げ、腕を伸ばして高く支えてやると、にこにこ笑い、地面におろすとすぐ

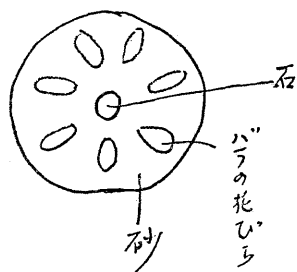
に走り去って砂場にゆく。

Nは元気のよい男の子であり、三歳児のときに、後に記すMくんと共に、私との間に思い切った出会いがあり、それが契機となって、私が幼稚園にゆくたびに親しさを示してくれる。それは三歳の一学期の砂場で、いつも乱棒にとびかかってくるMくん、Nくんときき合いきれなかった私は、その日に、一緒に裸足になり、泥をかけ合って遊ぼうと自分の気持ちをきめた。それ以来、親しきの心がお互いに交流するようになったのである。(このことは、第七十六巻三号に記してある。)この日も、Nは私を見るとすぐにとんできて、親しみの心を寄せた。私もそれを嬉しく思った。しかし一瞬の後には走り去り、自分の遊びに向っていった。おとなと子どもとの両者が同時に親しさを共感する時間である。それは突然そこに挿入された点のように見えるが、私共の生活の中には、そのようなスポットがいくつもあって、それが支えになって、それぞれの独自の行為が安定して進行するのではないかと思う。また、しばしば、このような親しきの交流のスポットは、新たな行為を生み出す源泉となる。いま、Nには、明らかに自分の世界があり、この日の私とのふれ合いは、その中に点在する他人との親しきの交流のスポットである。

花びらのデザイン

私は砂場に歩いてゆくと、砂場の縁にある道具入れの中に、丸い皿に砂をいれて小石とバラの花びらを配したものが置いてあるのに気がつく。女兒が三人来て、「あ、きのうのつづきがあった」と云う。女の子たちは砂場にはいる。Nがそこに来て、女兒がキヤーと逃げるのを追いかける。男の子と女の子と追いかけて遊ぶ楽しさが双方にある。

図1に示した丸い皿の中の小石とバラの花びらのデザインは、調和のとれた完結形である。形として作り易いデザインと考える



▶ 図 1

こともできるが、形を作る主体の側にも対応した調和のある生活感覚があるのだからと私は想像する。このデザインの皿が、この女兒たちの手で、昨日つくられて、人目につかない砂場の道具入れの中に置かれていた過程を考えると、この子どもたちにとつて、これは大切なものであり、こ

の子たちの生活の内容と関連づけて考えてよいと思う。

その女の子たちと男児とは、しばらくの間、追いかけ合うことを楽しむが、Nが二人をつかまえるとそれで終り、女の子たちは、いつものように、砂場で溝をほり、山をつくりはじめる。

(このころ、女児が砂場をやるのが目についていた。) Nも他のところにくゆ。両方の子どもたちにとって、これも、自分の世界の中に点在する親しさの交流のスポットのひとつである。

D——社会のひろがりの中で自分を探る

男児Dが部屋から出てきてぶらぶらしていたが、砂場のはしで、山をつくりはじめる。山が次第に高くなると、四、五人の男児と一緒にやりはじめる。みんな歌をうたいながら、シャベルをふり上げて、砂を盛りあげる。数人で一緒に、砂をシャベルですくって山にするのが楽しいという感じである。

Dは三、四歳のころには、砂の中に自動車を埋めたり、石を砂の中にいれ、上から砂をかけてかくしたりしていた子どもで、長い間、十分に遊びまわることができず、友だちとのつきあひもうまくできなかった。このシリーズの中でも、何度か記したことがある。幼稚園の後半になって、部屋の中で飛行機や電車を紙で作ることが面白くなり、五歳になってからは、汗をかいて走りまわる

姿をしばしば見かけるようになった。この日は砂場で物を埋めるのではなく、力をこめて砂を盛り上げ、高い山を作る。前に考察したように、砂の中に埋める物を自分自身の象徴と見るならば、Dはもはや自分自身を人の目からかくす必要はなくなつて、むしろ、だれの目にも聳え立って大きく見える山を、力をこめて作っているように思われる。しかも、一人でなく、数人の男の子たちと一緒に歌をうたいながら作業をすることを楽しんでゐる。ひとりで砂の中にいろいろな物を埋めていたときには、自分の心の中でいろいろの可能性を探り、試みて、それを楽しんでいたのであると思うが、他人の目の前にそれを持ち出すことには、不安や恐れやためらいがあつたのだと思う。その後、室内で、自分の手で、幾重にもはめこみになった小さな飛行機を、一日中かけて作ったり、それを友だちからもすごいを作つたと云われたり、かなりの期間を室内で過して、戸外にあらわれることが少なくなつた。いまや、Dは、社会のひろがりの中で、友だちと楽しみながら、精力的に形あるものを作ろうとしている。この過程を思うとき、途中の日々がそれぞれの意味をもつていて、その積み重ねの上に、この日の山づくりがあることを認識することができる。自分の心の内奥で、一人の作業として探究する期間があるからこそ、現実の社会の場で建設的な試みをするができるようになる

っている。前の段階があるから、後の段階がある。けれども、後の段階のために、前の段階があるのではない。それぞれの時に、その時を充実して過すことによって、その時が意味あるものとなるのであって、いずれかが他方に従属するのではないであろう。いまふりかえっても、あの砂の中に物を埋めて、その上を叩いて、何が入っているか？ と云っていたころの、頼りなげな、しかしそこに動いていた繊細な心の世界は、それなりに豊かな世界であったと思う。そして、いま、大きな砂山を協同で作っているときにも、この子どもの繊細な心は、目にはつきりとは見えないところで動いているのだと思う。この日のDの伸びやかに楽しんでいる砂場の遊びは、また、幼稚園の終りの時期にふさわしい。

このことは、Dについてだけでなく、他の子どもたちのそれぞれの場面についても同様である。

As——自立への助け手

砂場のへりで、女兒Asは、さっきから、ひとり、容器に小石を並べたり、型ぬきをしている。園庭をへだてた太鼓橋の下で、女兒が数人ままごとをしている。Asは砂場のへりで型ぬきをしたプリンを、その太鼓橋の下に、だまって運ぶ。私も砂場のへりに腰をおろして、プリンの型ぬきをしていた。Asは何度も運んでい

るので、私が作ったプリンを渡したら、「イヤ」と云って受けとらない。私はいくつもプリンを作って並べておくと、しばらくして、Asは私の作ったプリンを持ってゆく。私はそのとき、何か親子の間のやりとりのような感じがした。

このとき、私はAsとの間で親子関係のような気がしたのは何だったのだろうか。普通、このような場面で、私が砂のご馳走を子どもに手渡すと、相手は大がい受け取ってくれる。受け取ってもらえないときは、その子とまだ十分に親しくなっていないときのように思う。Asの場合は、すでに私と親しい間柄である。かなり以前のことであるが、食事をたべるのがのろいAsは、お弁当が最後にひとりだけになってしまった。私はAsがお弁当を食べ終るまで、その傍で待っていた。弁当箱を仕舞うと、Asは親しげに私の膝にもたれ、それから私の手をひいて、一緒に庭に出た。それ以来、Asは私を見ると親しい顔つきを見せて近寄ってくるこがづいた。

この日、私はAsに砂のご馳走を差し出したのに、Asはそれを受けとらなかった。それなのに、私が作って並べておいたご馳走を、だまって持っていたのである。最初の場面では、ままごとをしている友だちのところにご馳走を作って運ぶAsは、独立した

一人前の人として、自力で事を成してゆくのであって、保護者がそこに介入する場所ではない。断然、独立を主張する。しかし、他方、保護者であるおとなの物は、潜在的に自分の物であって、いつでも利用できる。私は、自力で自分の世界を開いてゆこうとする女の子に、余計な助けの手を差し出したのではなかったかと思つた。その反面、だまつて、私の作つた物を持っていつてくれたことを嬉しく思つた。

M——出合いの完結

男児Tは、砂場の外で皆を見ていたが、「こまつたなあ、Kちゃんもぼくと遊びたいっていうし、Nくんもぼくと遊びたいっていうし」と云つて、結局、Kちゃんたちのやつている木工場にゆく。木工場では、K、Y、Ms、Mらの男児たちが、木を切つたり、釘を打ちつたりしている。

隣の組の五歳児の子どもたちが、ブーメランをしていたが、木にひっかかり、とれないで困っている。私が棒でとろうとする。木工場にいたMくんがとんでくる。「かたぐるまして」というので、肩車をしてやると、すぐに取る。私は、今日、Mくんの肩車をしてやれてよかつたと思う。

Mくんは、このシリーズの中で、しばしば登場した、このクラスで最も元氣のよい男児である。肩車をしてやったことは何度もある。この子どもは、高い所にある物を、遠くから望み見ているのではなく、何としても自分の手で取ろうとする。それだけの体力も、運動力も、エネルギーも持っている。この日も私の肩にのると、高い木の上まで体を伸ばしてブーメランを取り、得意氣である。

先にNくんのところで記したように、三歳の一学期の砂場で、Mくん、Nくんと出会つたことが、私をこのクラスにひきずりこんでくれたとも云える。私共はしばしば、子どもと一緒にいるところにおいても、子どもの世界とかけ離れたところに立っていることもある。自分も上衣を脱ぎ、裸になつて、共に泥にまみれることを迫られるとき、そのときの体験は、抗しがたい生命力をもつた現実であり、同時に、それだけ心の深みに達する体験であつて、必然的に、内的な想像力を呼び起してくれる。保育の体験は、こうした現実と想像とが表裏をなしたものであることを、明瞭に認識する契機となつたのは、あの三歳の時のMくんとの出合いであつたと思う。もちろん、時定のできごとが極立つた輪郭をもつて意識に上ることがあるにしても、他の場面での、他の子どもとの数多くの出合いの連続の中で意味をもつのであることは云うまでも

ないが。

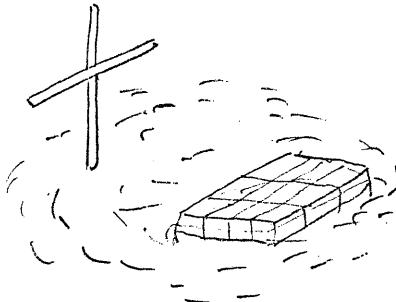
この日、Mくんが私の肩の上で高い木に手を伸ばしたことは、予期しなかったことであるが、このクラスの最終の日の保育を完結させる体験のように思えて、私にとって嬉しくもあり、不思議なことであった。

十字架と墓

その後、私は砂場にはいり、たいやきの型をいじったり、容器をいじったりして時を過していた。みんなよく遊んでいて、私は

また手持ちぶさたであった。

そこに男児Kzが来た。手に木の十字架を持っている。それを砂に立て、その前に私が型ぬきをして作ったプリンとたいやきを置き、籠をかぶせる。「おはか」という(図2)。だれのお墓? とたずねても何も答えないで去る。



▼ 図 2

こんなことが最終の日に起

るのはどうしてなのか、これも全く不思議である。あたかも、子どもたちは、最終の日であることを意識して行動しているかのようである。しかし、子どもが、意図してこのように行動しているとは考えにくい。偶然にこうした遊びがあらわれたとしか云えない。

私が作ったものを、籠で蔽い、内側にかくして、その前に十字架を立て、お墓というのは、私とのつきあいに終止符を打つことを宣言しているように思える。Kzとは、何度も一緒に遊び、心を通わせた。それも否応なしにこの日で終りになる。子どもは自分からそれを葬むって、次の生活に出發しようとしているかのようである。幼児とのつきあいは、その時には心の奥まで気持を通わせて遊んだように思っても、淡々としていてあとを引かない。

ma —— 身体の形の再現

女兒maが滑り台の下でひっくりかえり、ちょっと泣きそうになる。私が傍にゆくと、「こういう風にひっくりかえったの」と、ひっくりかえったときの身体の形を再現してみせる。

自分の身体の運動を頭の中に思い描いて、それを身体の形として表出することは、この子どもの特色であるように思える。この

三年間の中でもいろいろある。白雪姫のおばあさんになってと云って、その中でみせたいろいろのしぐさ、他の子どもがやる通りに手足を動かしてみたり、また、夢見るような目で何かをしているときには、現実の友人関係は眼中にないように見えたり、突然泣き出したり、これでなければいやだと云い張るときなど、わがままで幼稚すぎるように思えることもあった。いま、この子どもが運動感覚や身体の形を頭に思い描いているのを見るとき、この子どもが固執するほどに云い張ったり、泣いたりしたときにも、その頭の中には有形無形のさまざまな空想があったのだろうと察することができる。この子どもが頭の中に思い描く仕方には、独特の面白さがある。その内的世界の価値が認められてきたので、この子どもはそれなりに柔軟に友だちと交わりながら、自分の世界を表出するようになっていく。この後通過しなければならぬ学校の生活の中で、その独自の世界はどのようにして持ちこたえられるであろうか。

この日、一日、私はそれぞれが自分達でよく遊ぶのを感じて見た。

この日の遊びは、この日だけを見ても面白いが、この三年間のことだけを考えても、過去の場面のそれぞれと関連がある。その過去が現在だったときに、その時に応じて子どもが充実した生活ができるように保育がなされてきたそのことと関連がある。その過去の一日がなかったなら、今日の一日もなかったであろう。今日友だちと楽しんでひとつのことをしている子どもたちは、過去においては、同じ場所で共存するのに大変な困難のあった子どもたちである。そのときに、保育者が、その時の現在に身を浸して、それぞれの子どもたちの生活の充実を考えながら保育してきたことが今日を作っている。そのときに育てられたものが今日の中にふくまれている。このことが、この三年間のこのシリーズによって、いくらかでも明らかにできたならば幸いである。

この幼児たちにとっては、この三年間のことは、大きくなってからの記憶にはほとんど残らないであろう。しかし、それが、それぞれの個人の意識以前の歴史を形成していることは明らかである。五歳児の三学期の終りまで見てきて、ここまでの期間に育てられるものがいかに大きいかをあらためて感じる。おとなの生活の中での精神的課題が、素朴な原始的な形で、この幼児期にすべて含まれていると云ってもよいくらいである。

この子どもたちの生活は、ここで一つの区切りを迎えた。ま

た、幼児期という人生の基本的な時期を乗りこえて、次の時期へと向う。そこでは幼児期が消去されるのではなく、幼児期に獲得された基本のほとんど無意識の堆積の上に、新たに抬頭してくる能力をもって、積み上げられてゆくものである。この後の生活も、広がりゆく社会生活の中で、新たな課題に直面し、常に変動しながら進みゆくであろう。その後も、一日一日が充実した生活となるように、保育者としての助け手を必要とするし、ある時期がくると、彼ら自身が広い意味での保育者として他人の成長の助け手となってゆくであろう。

おとなとして、三年間の子どもの成長を見てきた私共は、この三年目の最終の時期の子どもの行動が、少なくともこの三年間の過去に支えられてあり、また、未知の、しかしある程度の自信のある未来の展望の中に成り立っていることを認識することは容易である。いま、目前に見るべきことは、過去も未来も含み、精神世界をもった人間の現象である。このシリーズで私がつた方法は、現象のこのような認識の上に立っている。子どもとかかわる保育の体験によってとらえた子どものは、自分自身の、生きた世界の総体と、他である子どもの、生きた世界の総体との境界にあらわれる現象である。その現象のこまかな観察を通して、背後にある世界を知るにはその事実的側面に忠実であることが根

本であり、思いがけないところにつながりを発見する連想や、感によって茫漠ととらえたことの中に意味を見出す想像など、複数の思考法を要する。このような保育現象の考察は、保育実践の前提ともなつてゆくものである。幼児の保育を通して、私共は人間を学ぶのであり、そのような意味で、保育学は人間学である。

幼稚園の三歳児が五歳児になるまでの生活を月ごとに追うことを骨子として、その同じ時期に、知恵おくれの子どもはどのようなか、また、家庭での生活はどうであるかを付け加えながら、いずれも、私自身が子どもと交わる保育の中で得られた体験の資料をもとにして、幼児の世界を考えてきた。ここで考察してきたことは、ほとんど無限にひろがる子ども世界のほんの一部にすぎないことはいまでもない。また、幼い子どもは保育を通して、人が得てゆく知恵にも限りはない。

いま、幼稚園の五歳児の最終の日の考察を終えた。保育の体験と思索のシリーズは、これで終りとする。

(おわり)

「緑蔭に書を縫きつゝ、盛夏を過ごす。」
暑さのしのぎかたにも、古人のそれは、そこはかとなしきが漂っている。私どもの周囲から樹木が消え、都会の八月は、緑蔭とはほど遠いけれど、夏休みの一ひとときは、古人にならって、やはり、ゆっくりと書物の頁を繰りたいものだ。

保育とは、文字や言葉で表現される硬質な論理にもまして、肉体と感受性の論理を基盤とする営みである。文字との戯れを、ロゴスの世界のことからと見るなら、保育とは、その対極に位置するとも言い得よう。保育者とは、子どもらとの出会いの中に己れを開き、肉体と感受性のすべてを働かせて、一瞬々々を生きる存在なのだ。

保育者たちが、自身を縦糸とし、子どもらを横糸として、日々、紡ぎ出す保育現象は、それだけで、一枚の巨大なテキ

ストなのだが、縦糸でもあり、織り手でもある保育者たちは、自身の織り成すテキストを読み解くいとまもなく、慌しく、翌日の機に、また、新しい糸をかけねばならない。

そんな日常性から解放される夏休みは、保育者にとって、周期的に訪れる「ハレの日」である。そのゆえにこそ、保育現象を遠く離れて、思いきり、異質の世界に遊ぶもよしと、日頃、保育界とは余りご縁のない方々に、図書の紹介をお願いした。結果として、様々な分野から指名された「書物たち」が、ご紹介くださった方々の個性と、それぞれの学問の位相を体現しつつ、ずらりと顔を揃えて、楽しい特集が出来上った。

「ひもとく」とは、花が開く意であると言う。訪れる夏休み、これら書物の世界は、私どもの前に、どんな花を開いて見せてくれるだろうか。(本田和子)

幼児の教育 第七十九巻 第八号

八月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年七月二十五日 印刷
昭和五十五年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行人 津 守 真
編集兼

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

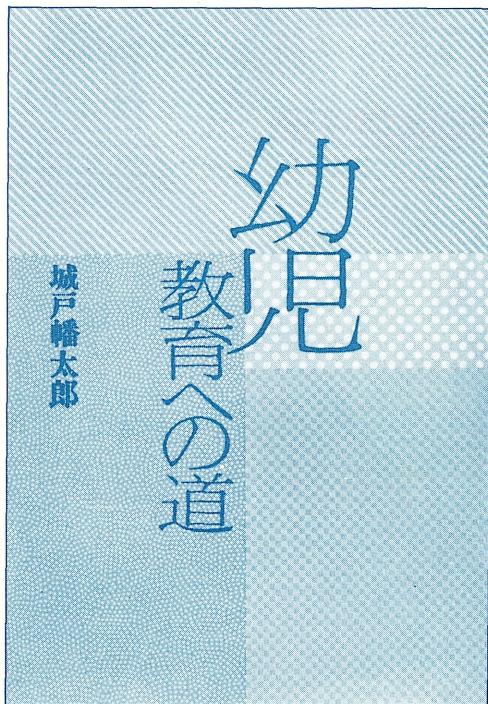
城戸幡太郎・著

B 6 判・340頁・1,300円 円160円

幼児教育への道

新刊案内

保育の科学的研究の必要性から、保育者と学者の協力をとぎ、子どもへの幸せのためには保育の一元化と義務制が必要なこと、そして保育者の質の向上が何よりも望まれることを力説。



くわしくは、フレール館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

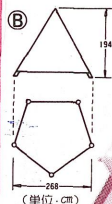
フレール館

子どもたちの遊びの空間を広げます!

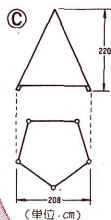


インディアンテント

ダムス社



- ★ 高品質の布製テントです!
- ★ 軽く、組立も、片付けも、簡単です!
- ★ 室内、室外いづれにも使え、ごっこ遊びがより楽しくなります。

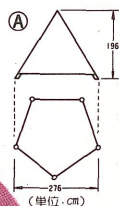


インディアンテントB

38,800円

インディアンテントC

28,600円



インディアンテントA

45,600円

くわしくは、フレーベル館代理店、支社、支店、営業所、特約店または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館